Hokkaido University News

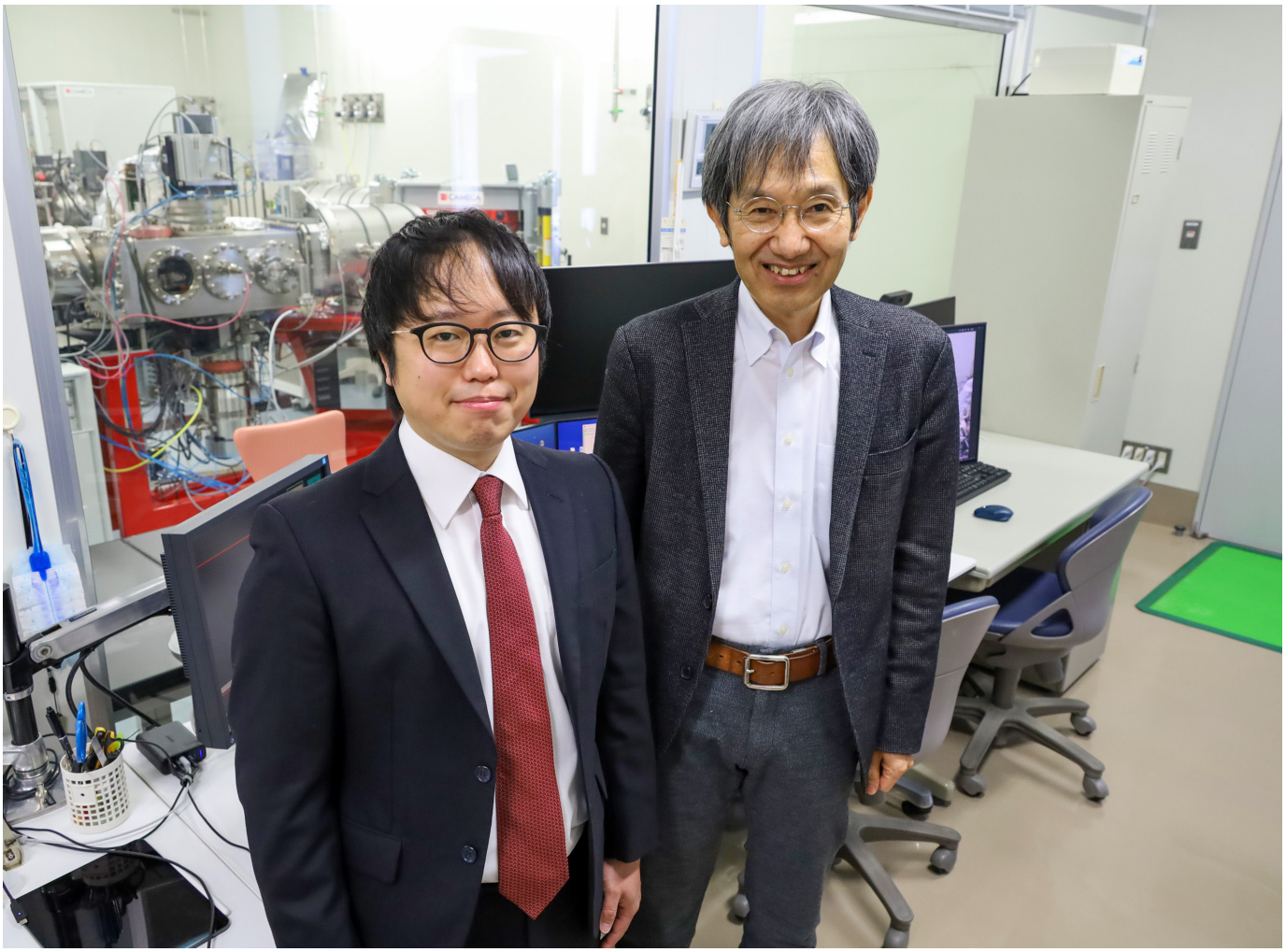
北大時報

令和5年
3
No. 828　March 2023

北海道大学一般選抜（前期日程・後期日程）及び私費外国人留学生（学部）入試の実施と合格者の発表

故吉見理事・副学長を偲ぶ会を開催

創成科学研究棟にて報道関係者向け説明会を実施 川﨑教行准教授（理学研究院）、臼本尚義教授（創成研究機構／理学研究院）が登壇

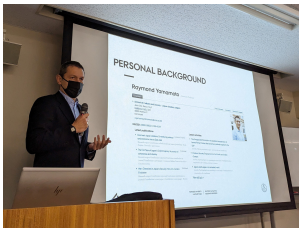


No.828　令和5年

目　次

3

故吉見理事・副学長を偲ぶ会を開催



現代日本学プログラム課程「ゲストレクチャー・ワークショップシリーズ」を開催

全学ニュース

1　北海道大学一般選抜（前期日程・後期日程）及び私費外国人留学生（学部）入試の実施と合格者の発表
4　故吉見理事・副学長を偲ぶ会を開催
5　現代日本学プログラム課程「ゲストレクチャー・ワークショップシリーズ」を開催
6　「国民との科学・技術対話」支援事業　アカデミックファンタジスタ　札幌北高校にて、2名の研究者が講義を実施
7　令和4年度第10回　定例記者会見を開催
8　北大フロンティア基金
10　令和4年度 第1回部局・分野横断技術交流会「分析時の困りごと解決！異分野交流で未知の装置不調原因物質の正体を探る」を開催
11　創成科学研究棟にて報道関係者向け説明会を実施　川﨑教行准教授（理学研究院）、圦本尚義教授（創成研究機構／理学研究院）が登壇
12　創成研究機構ワクチン研究開発拠点が人獣共通感染症国際共同研究所と合同セミナーを開催
13　日本初！デンマーク発スタートアップイベント「TechBBQ SAPPORO」を開催
14　nano tech 2023展示会で最新のナノテク研究成果をアピール！
15　SCSK北海道社とオープンイノベーションプログラム「ハッカソン」を開催
16　大学院教育推進機構リカレント教育推進部が北大道新アカデミー告知動画を制作

部局ニュース

17　プラス・ミュージアム・プログラム2022年度「クロージングフェスタ」を開催
18　文学部書香の森展示スペースにて4本の企画展示を開催
19　スラブ・ユーラシア研究センター国際シンポジウム「ウクライナとロシアの生存戦略：開戦から1年を迎えて」開催
20　先端生命科学研究院でFDSD研修会「総会2022」を開催
21　令和5年度薬学実務実習開始セレモニーを挙行
22　低温科学研究所がベルリン応用科学大学生命工学部と部局間交流協定を締結

定年を迎えるにあたって　23

表敬訪問　51

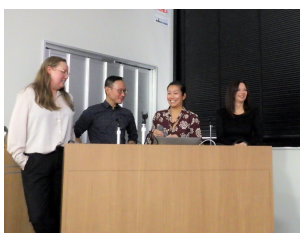
人事　52

52　新任教授紹介

訃報

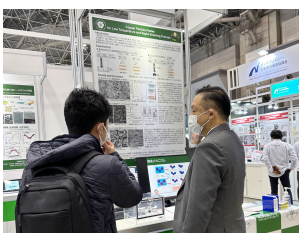
53　理事・副学長　吉見　　宏　氏
54　名誉教授　土屋　　博　氏
54　名誉教授　引地　邦男　氏
55　名誉教授　東　　市郎　氏
55　名誉教授　梶原　昌弘　氏
56　名誉教授　箕田　　嵩　氏

「国民との科学・技術対話」支援事業
アカデミックファンタジスタ 札幌北高校にて、2名の研究者が講義を実施



創成研究機構ワクチン研究開発拠点が人獣共通感染症国際共同研究所と合同セミナーを開催

日本初！デンマーク発スタートアップイベント「TechBBQ SAPPORO」を開催



nano tech 2023展示会で
最新のナノテク研究成果をアピール！

表　紙：創成科学研究棟にて報道関係者向け説明会を実施 川﨑教行准教授（理学研究院）、圦本尚義教授（創成研究機構／理学研究院）が登壇（関連記事11頁に記載）
裏表紙：キャンパス風景㊱　第一体育館（北17条西7丁目）

北海道大学一般選抜（前期日程・後期日程）及び私費外国人留学生（学部）入試の実施と合格者の発表

令和5年度一般選抜の前期日程試験は2月25日（土）・26日（日）に、後期日程試験は3月12日（日）に実施しました。また、私費外国人留学生（学部）入試第2次選考は2月17日（金）に実施しました。

各試験の実施状況等は、次のとおりです。

1. 前期日程

志願者5,284名のうち、本学が指定した大学入学共通テストの受験を要する教科・科目を受験していなかった無資格者3名を除く志願者について、2段階選抜の第1段階選抜を行いました。その結果、志願者全員が合格し、個別学力検査等の受験対象者は5,281名で、受験者は5,143名でした。

合格者は2,006名で、合格発表は、3月8日（水）午前9時に本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が687名で全体の34.2％。卒業年度別では、令和5年3月高等学校卒業者が1,486名で全体の74.1％。また、男女別では女子が608名で全体の30.3％でした。

2. 後期日程

志願者4,524名のうち、本学が指定した大学入学共通テストの受験を要する教科・科目を受験していなかった無資格者1名を除く志願者について、2段階選抜の第1段階選抜を行いました。その結果、志願者全員が合格し、個別学力検査等の受験対象となった者は4,523名で、受験者は1,894名でした。

合格者は515名で、合格発表は、3月20日（月）午後4時に本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が61名で全体の11.8％。卒業年度別では、令和5年3月高等学校卒業者が331名で全体の64.3％。また、男女別では女子が125名で全体の24.3％でした。

また、前期及び後期日程試験を新型コロナウイルス感染症への罹患等により欠席した志願者に対し、3月22日（水）に追試験を予定しておりましたが、該当者がいなかったことから実施しませんでした。

3. 私費外国人留学生（学部）入試

私費外国人留学生（学部）入試の志願者は109名で、第1次選考の合格者は31名、第2次選考の受験者は22名、合格者は4名でした。

（学務部入試課）

令和5年度一般選抜（前期日程）合格者数等一覧

学部・学科等				募集人員	受験対象者	欠席者	受験者	倍率	合格者
総合入試	文系			95	350 (105)	12 (3)	338 (102)	3.6	105 (27)
	理系	数学重点選抜群		125	462 (69)	11 (2)	451 (67)	3.6	130 (15)
		物理重点選抜群		225	654 (100)	12 (1)	642 (99)	2.9	231 (30)
		化学重点選抜群		226	612 (147)	11 (3)	601 (144)	2.7	235 (52)
		生物重点選抜群		169	417 (171)	7 (2)	410 (169)	2.4	174 (73)
		総合科学選抜群		239	443 (143)	10 (5)	433 (138)	1.8	247 (68)
学部別入試	文学部			118	330 (160)	4 (1)	326 (159)	2.8	123 (60)
	教育学部			20	55 (27)	0 (0)	55 (27)	2.8	21 (12)
	法学部			140	363 (119)	5 (3)	358 (116)	2.6	146 (40)
	経済学部			140	328 (73)	4 (0)	324 (73)	2.3	150 (32)
	医学部	医学科		85	291 (90)	16 (5)	275 (85)	3.2	90 (28)
		保健学科	看護学専攻	60	148 (135)	9 (8)	139 (127)	2.3	68 (62)
			放射線技術科学専攻	28	83 (31)	3 (0)	80 (31)	2.9	36 (14)
			検査技術科学専攻	25	106 (68)	3 (3)	103 (65)	4.1	36 (26)
			理学療法学専攻	13	34 (11)	3 (2)	31 (9)	2.4	16 (4)
			作業療法学専攻	10	74 (40)	4 (2)	70 (38)	7.0	17 (10)
	歯学部			38	149 (64)	13 (7)	136 (57)	3.6	42 (19)
	獣医学部			20	95 (52)	3 (2)	92 (50)	4.6	22 (6)
	水産学部			105	287 (61)	8 (3)	279 (58)	2.7	117 (30)
計				1,881	5,281 (1,666)	138 (52)	5,143 (1,614)	2.7	2,006 (608)

※（　）内の数字は女子で内数

令和5年度一般選抜（後期日程）合格者数等一覧

学部・学科等			募集人員	受験対象者	欠席者	受験者	倍率	合格者
学部別入試	文学部		37	333 (121)	199 (73)	134 (48)	3.6	48 (19)
	教育学部		10	129 (47)	73 (27)	56 (20)	5.6	12 (6)
	法学部		40	516 (158)	296 (90)	220 (68)	5.5	45 (15)
	経済学部		20	231 (39)	157 (27)	74 (12)	3.7	22 (3)
	理学部	数学科	10	110 (6)	64 (1)	46 (5)	4.6	10 (1)
		物理学科	3	97 (10)	50 (5)	47 (5)	15.7	3 (0)
		化学科	20	182 (26)	101 (14)	81 (12)	4.1	20 (2)
		生物科学科　生物学専修分野	10	83 (30)	44 (20)	39 (10)	3.9	10 (3)
		生物科学科　高分子機能学専修分野	2	24 (10)	9 (6)	15 (4)	7.5	3 (1)
		地球惑星科学科	5	74 (16)	38 (9)	36 (7)	7.2	8 (1)
	薬学部		24	347 (134)	191 (75)	156 (59)	6.5	32 (9)
	工学部	応用理工系学科	29	381 (53)	240 (28)	141 (25)	4.9	39 (8)
		情報エレクトロニクス学科	38	458 (35)	280 (22)	178 (13)	4.7	42 (3)
		機械知能工学科	25	231 (23)	150 (12)	81 (11)	3.2	29 (3)
		環境社会工学科	47	376 (77)	221 (47)	155 (30)	3.3	56 (8)
	農学部		53	468 (152)	261 (92)	207 (60)	3.9	59 (19)
	獣医学部		15	105 (61)	43 (21)	62 (40)	4.1	15 (11)
	水産学部		50	378 (77)	212 (37)	166 (40)	3.3	62 (13)
計			438	4,523 (1,075)	2,629 (606)	1,894 (469)	4.3	515 (125)

※（　）内の数字は女子で内数

令和5年度私費外国人留学生（学部）入試合格者数等一覧

学部・学科等

学部・学科・専攻・コース等		志願者		第1次選考合格者		第2次選考受験者		合格者	
文学部	人文科学科	18	(5)	−	−	−	−	−	−
教育学部	教育学科	4	(1)	4	(1)	3	(1)	0	(0)
法学部	法学課程	6	(4)	1	(1)	1	(1)	0	(0)
経済学部	経済学科	5	(2)	2	(0)	0	(0)	−	−
	経営学科	6	(1)	1	(0)	0	(0)	−	−
理学部	数学科	4	(2)	4	(2)	4	(2)	0	(0)
	物理学科	3	(0)	0	(0)	−	−	−	−
	化学科	−	−	−	−	−	−	−	−
	生物科学科	3	(2)	0	(0)	−	−	−	−
	（生物学専修分野）	1	(0)	0	(0)	−	−	−	−
	（高分子機能学専修分野）	2	(2)	0	(0)	−	−	−	−
	地球惑星科学科	−	−	−	−	−	−	−	−
医学部	医学科	−	−	−	−	−	−	−	−
	保健学科	2	(1)	1	(1)	1	(1)	0	(0)
	看護学専攻	−	−	−	−	−	−	−	−
	放射線技術科学専攻	−	−	−	−	−	−	−	−
	検査技術科学専攻	2	(1)	1	(1)	1	(1)	0	(0)
	理学療法学専攻	−	−	−	−	−	−	−	−
	作業療法学専攻	−	−	−	−	−	−	−	−
歯学部	歯学科	3	(2)	0	(0)	−	−	−	−
薬学部	薬科学科	2	(0)	0	(0)	−	−	−	−
	薬学科	−	−	−	−	−	−	−	−
工学部	応用理工系学科	9	(3)	4	(1)	2	(0)	1	(0)
	応用物理工学コース	1	(0)	0	(0)	−	−	−	−
	応用化学コース	6	(3)	2	(1)	1	(0)	0	(0)
	応用マテリアル工学コース	2	(0)	2	(0)	1	(0)	1	(0)
	情報エレクトロニクス学科	16	(5)	4	(1)	3	(1)	1	(1)
	情報理工学コース	9	(3)	3	(1)	3	(1)	1	(1)
	電気電子工学コース	7	(2)	1	(0)	0	(0)	−	−
	生体情報コース	−	−	−	−	−	−	−	−
	メディアネットワークコース	−	−	−	−	−	−	−	−
	電気制御システムコース	−	−	−	−	−	−	−	−
	機械知能工学科	3	(1)	0	(0)	−	−	−	−
	機械情報コース	1	(0)	0	(0)	−	−	−	−
	機械システムコース	2	(1)	0	(0)	−	−	−	−
	環境社会工学科	1	(0)	0	(0)	−	−	−	−
	社会基盤学コース	−	−	−	−	−	−	−	−
	国土政策学コース	−	−	−	−	−	−	−	−
	建築都市コース	1	(0)	0	(0)	−	−	−	−
	環境工学コース	−	−	−	−	−	−	−	−
	資源循環システムコース	−	−	−	−	−	−	−	−
農学部	生物資源科学科	1	(0)	0	(0)	−	−	−	−
	応用生命科学科	4	(0)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
	生物機能化学科	3	(1)	0	(0)	−	−	−	−
	森林科学科	2	(1)	1	(1)	1	(1)	1	(1)
	畜産科学科	2	(2)	1	(1)	1	(1)	0	(0)
	生物環境工学科	−	−	−	−	−	−	−	−
	農業経済学科	−	−	−	−	−	−	−	−
獣医学部	共同獣医学課程	−	−	−	−	−	−	−	−
水産学部	海洋生物科学科 海洋資源科学科 増殖生命科学科 資源機能化学科	12	(2)	7	(2)	5	(0)	1	(0)
合計		109	(35)	31	(11)	22	(8)	4	(2)

※（ ）内の数字は女子で内数

国・地域別

国・地域	志願者		第1次選考合格者		第2次選考受験者		合格者	
中国（香港を含む）	78	(29)	27	(11)	19	(8)	3	(2)
韓国	24	(4)	3	(0)	2	(0)	1	(0)
台湾	5	(2)	0	(0)	−	−	−	−
ベトナム	2	(0)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
合計	109	(35)	31	(11)	22	(8)	4	(2)

※（ ）内の数字は女子で内数

故吉見理事・副学長を偲ぶ会を開催

1月2日（月）にご逝去されました理事・副学長の吉見　宏　氏への哀悼の意を表し、3月3日（金）学術交流会館において大学及び経済学研究院の主催により「偲ぶ会」が開催されました。

第1部として偲ぶ会には、役員、副学長、副理事、経済学研究院の関係者の参列に加え、ご遺族にもご臨席いただき、冒頭、寶金清博総長及び久保田肇経済学研究院長の挨拶では、吉見先生の生前のご功績を讃えるとともに、大学の管理運営や経済学研究院への多大なる貢献に対する感謝の言葉が述べられた後、参列者による黙祷、献花が行われました。

その後、第2部では、吉見先生にゆかりのある経済界や行政の関係者、教職員・学生らが、先生のご冥福をお祈りし、別れを惜しむ献花の列が続きました。

また、会場には吉見先生の業績や想い出の写真画像を展示したメモリアルコーナーが設けられ、61歳というあまりに早すぎるお別れに、学内における功績はもちろん、社会活動を通じて幅広い活躍をされ、地域の活性化に取り組んだ吉見先生を偲び、多くの方々が悲しみを新たにしていました。

なお、本会は研究室関係者・事務職員・その他関係各位に多大なるご協力を賜り、心より御礼申し上げます。

（総務企画部総務課、経済学院・経済学研究院・経済学部）

挨拶する寶金総長

挨拶する久保田研究院長

献花台

現代日本学プログラム課程「ゲストレクチャー・ワークショップシリーズ」を開催

現代日本学プログラム課程（現プロ）では、令和4年度第2学期に、対面による「ゲストレクチャー・ワークショップシリーズ」を開催しました。

本シリーズは、学内外の日本研究分野の専門家を招き、現代日本学の最先端について学ぶことを目的としていますが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、ここ数年オンラインでの開催となっていました。この度、石見　禎講師（国際教育研究部・現プロユニット）が外部講師らを招いて、学際的な視点から日本研究をテーマとして、対面形式による講演を8回にわたり実施し、合計97名の留学生が現代日本学の諸相を学びました。

現プロでは令和5年度も、在学生の現代日本への学びをさらに深めるべく、日本研究をテーマとするゲストレクチャー及びワークショップを実施する予定です。

（学務部教育推進課）

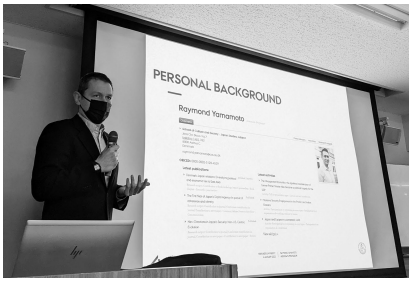
講演内容及び登壇者

・10月21日（金）「社会科学からシリアルアントレプレナーへ」
　タイソン・バティノ氏（Scaling Your Company社）
・11月 1日（火）「日本で働く秘訣とは」
　サイモン・メットカーフ氏（九州観光機構）
・11月 9日（水）「将来を切り開く」
　ネッタ・ホンジスト氏（DEMORA社）
・11月11日（金）「文化とビジネス」
　ジョー・ラッシュ氏（In Touch Sports社）
・12月 2日（金）「国際交流基金とパブリックディプロマシー」
　原　秀樹氏（国際交流基金日本研究部長）
・12月 6日（火）「日本の防衛」
　佐藤和之本部長（自衛隊札幌地方協力本部）
・12月 9日（金）「駐日外交官としての役割」
　トーマス・アップルトン一等書記官（ニュージーランド大使館）
・ 1月 6日（金）「日本のデジタルトランスフォーメーションとその課題」
　レイモンド・ヤマモト准教授（オーフス大学）

原氏（国際交流基金日本研究部長）

佐藤本部長（自衛隊札幌地方協力本部）

アップルトン一等書記官
（ニュージーランド大使館）



ヤマモト准教授（オーフス大学）

「国民との科学・技術対話」支援事業　アカデミックファンタジスタ 札幌北高校にて、2名の研究者が講義を実施

「『ひも』で分子を創造する」　工学研究院　准教授　猪熊泰英

有機化学が専門の猪熊准教授は、オリジナルのひも状の分子から、あらゆる形状と性質を持つ、新しい分子を生み出しています。講義では、最新の研究成果を紹介するとともに、有機化学の基礎について解説。様々な有機分子のサンプルを見せながら、分子の長さや形が変わると、粘度・色・匂いなどの性質が大きく異なることを紹介しました。

UVライトをあてると光る分子を紹介する猪熊准教授

日　　時：2023年1月23日（月）16：00～17：30
会　　場：北海道札幌北高等学校
参加生徒：1、2年生 20名

「マスク顔コミュニケーションの認知心理学」　文学研究院　教授　河原純一郎

コロナ禍以降、私たちの生活は、常にマスクを着用するように変わりました。河原教授は、マスクの着用がコミュニケーションにどのように影響するのかを、認知心理学者としての見地から研究しています。講義では、表情の読み取りや個人の見分け、印象形成などへのマスク着用の影響について、様々な実験結果をもとに解説しました。また、コロナ流行後、マスク顔への印象が変わってきていることも紹介しました。

マスク着用の印象への影響について語る河原教授

日　　時：2023年2月10日（金）16：15～17：30
会　　場：北海道札幌北高等学校
参加生徒：1、2年生 24名

アカデミックファンタジスタとは？

北海道大学の研究者が知の最前線を出張講義や現場体験を通して高校生などに伝える事業、「アカデミックファンタジスタ（Academic Fantasista）」。内閣府が推進する「国民との科学・技術対話」の一環として、北海道新聞社の協力のもと2012年から継続的に実施しています。今年度はコロナ対策を十分に行って、札幌近郊の高校等を対象に22名の教員が講義を実施しています。

北大の研究を発信するウェブマガジン「リサーチタイムズ」や、Facebookでも講義レポート等を随時更新中です。こちらもぜひご覧ください。

・リサーチタイムズ
https://www.hokudai.ac.jp/researchtimes/academic-fantasista/

・Facebook
@Hokkaido.univ.taiwa

（社会共創部広報課）

リサーチタイムズ

フェイスブック

令和4年度第10回　定例記者会見を開催

2月16日（木）、本学の特色ある教育研究活動や運営状況等を社会に向けてわかりやすく発信することを目的とした「定例記者会見」を開催しました。行松泰弘理事の挨拶で会見が始まり、黒岩麻里総長補佐の進行のもと、北方生物圏フィールド科学センターの星野洋一郎教授、佐藤浩幸技術専門員、石山知美事務補佐員、農学研究院の野口　伸教授が発表しました。北海道教育庁記者クラブ加盟社等から14名の参加がありました。発表内容は以下の通りです。

（社会共創部広報課）

発表事項（発表者）

・北海道大学スマート農業教育拠点の取り組みについて
（北方生物圏フィールド科学センター　教授　星野洋一郎、技術専門員　佐藤浩幸、事務補佐員　石山知美）
・スマート農業教育研究センター（仮称）の設置について
（農学研究院　教授　野口　伸）
※発表資料掲載URL
https://www.hokudai.ac.jp/introduction/gov/office/pr/press-conference/R4.html

発表を行う星野教授

発表を行う野口教授

挨拶をする行松理事

左から黒岩総長補佐、佐藤技術専門員、野口教授、
行松理事、石山事務補佐員、星野教授

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動をすることとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報
基金累計額（1月31日現在）　36,529件　6,214,982,283円

1月のご寄附状況

法人等18社、個人337名の方々から18,969,631円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名、銘板の掲示について掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

株式会社石本建築事務所 札幌オフィス、株式会社エーピーアール、榊原工業株式会社、株式会社さすがや、
株式会社システムウォール製作所、株式会社チャンネル・ツー、ニチレキ株式会社、株式会社ビズヒッツ、ブルースタイル沖縄株式会社、
ベストセレクション株式会社、北海道武蔵女子短期大学、合同会社LIC、株式会社レビュー、ワタキューセイモア株式会社

寄附者ご芳名（個　人）

合川　正幸	青井　良平	青木　俊介	青木　毅	赤塚　和禧	秋山　俊彦	安久津昌義	朝倉　清高
朝倉　愛	阿部　雅史	アムノソロモン	新垣　雅人	安念　和哉	飯田　順一	五十嵐　健	池田淳一郎
砂子沢成人	石井　哲夫	石井　康裕	石垣　隆弘	石川三千雄	石橋　正	石原　隆之	石山　祥雄
市川　英明	市川　律子	市坂　有基	一柳　恵	伊藤　大貴	井野　智	猪股　路子	井原　博
今城　嘉久	入澤　秀次	岩崎　正則	岩渕　雅和	上田　進	上田　雅敏	梅田　雅司	梅本　由佳
縁記　和也	遠藤　公憲	及川　博	大條　雅昭	大篠　理乃	大岸　公子	大島　巌	大瀧　良雄
大友　陽子	大原　正範	小川　禔之	沖崎　遼	小黒　卓	小澤　廣	小田原一史	小野　紘一
小原　大和	垣谷　正晴	鍵和田哲男	風戸亜沙美	加藤　和代	加藤　真子	加藤　伸康	加藤　裕貴
金川　眞行	金子　和禾	金子　研一	亀井　伸吾	川上　征雄	川崎　正和	川中　正	川畑　一洋
川村　和彦	川村　潤一	河本　充司	河原林　裕	菅野　浩	蒲原　貢	岸本　佳則	北城　秀司
衣川　暢子	木村　祐介	工藤　和彦	久保田俊昭	熊倉　聡	栗林　俊幸	栗林　浩	桑原　隆司
上月　浩	小谷　満男	小林　賢人	小林　孝治	齊藤　晋	齋藤　久	佐伯　昇	三枝　邦幸
酒井　幹夫	酒井　裕二	榊　信昭	坂田　和幸	坂本　大介	佐々木哲郎	佐藤貴美子	佐藤長太郎
佐藤　秀樹	三升畑元基	塩原　潔	鹿内　賢司	志済　聡子	静　隆一	島倉　俊明	島田　悠紀
島村　泰介	清水　康宏	白田　廣一	白鳥　秀文	新宮　康栄	神　敏郎	神保　重孝	末永　文厚
菅原　新也	杉江　和男	杉本　聡	鈴木　章	鈴木　英一	鈴木　孝一	鈴木　貴之	鈴木　隆之
鈴木　雅史	鈴木　道雄	須田　昌夫	関下　芳明	瀬口　智勝	瀬名波栄潤	高岡　健仁	高木　勲
髙木　恒雄	高瀬登志彦	高田　紀史	髙橋　均	高柳　涼	竹内　久義	立野　正敏	田中　章喜
田中　享二	谷澤　靖久	田部井三浩	丹　信義	丹保　憲仁	近川　政久	月舘　吉一	土家　琢磨
土屋　徳生	出店　秀隆	寺井伊都子	寺澤　睦	寺島　俊郎	東郷　順三	富樫　博之	富樫林太郎
戸嶋　光映	利行　淳一	豊田　威信	鳥井　信吾	中川　嘉文	長崎　光政	中島　耀二	長瀬　尚
永田　幸嗣	永田　洋一	長手　愼一	中西　良知	中野　敏彦	中野　光弥	中平　淳	中村　文隆
中本　敏朗	中山　浩二	中山　正行	名越　優	夏目　祥宏	成田　豊隆	成田　満	新関　久男

西川　峻登	西田　実弘	西畑　健一	西村　大司	西村　尚武	新田　秀彦	沼田　大輔	根本　叔治
野口　恒久	野口　　徹	野田　哲二	野村　健司	萩田　晃一	萩原　弘道	畑中　俊朗	服部　清繁
花田　秀一	浜本　　聡	原　勢太郎	半田　隆夫	比志島康久	廣吉　直樹	福士　幸治	福田　晴耕
福永　悟郎	藤　　徹	藤澤　裕子	藤永　聖治	藤野　勝裕	藤本　　朗	古田　宏一	堀田　　明
本間　　章	前田　　博	前田　陽子	松井　耕二	松橋　数保	松原　謙一	松本　修一	松本　　嶺
眞鍋　　亮	三浦　標野	三上　　隆	南田　大朗	三橋　國利	三原　達美	宮尾幸之助	宮川　英一
宮田　信幸	村上　泰一	村瀬　一基	村瀬徳啓充	村瀬　亮太	室橋　春光	森本　　勲	矢嶋　　剛
安田　　勲	安田　　元	山川　佳久	山口　淳二	山﨑　　裕	山﨑　幾蔵	山﨑　英氣	山下　裕久
山城　明宏	山田　澤明	余湖　静也	横田　一彦	横山　　考	吉川　謙造	吉田　広志	若狭　　哲
若生　憲司	輪島　　繁	渡辺　昭雄	渡邉　英雄	渡部　克将			

銘板の掲示　20万円以上のご寄附で新規に銘板を掲示される方

（個　人）

石原　隆之、市川　英明、市川　律子、久保田俊昭、高木　　勲

（法　人）

株式会社さすがや、北海道武蔵女子短期大学

〈感謝状の贈呈〉

医療法人社団憲仁会牧田病院様（令和5年2月1日）

株式会社NIKI Hills ヴィレッジ様（令和5年2月7日）

ご寄附のお申し込み方法

北大フロンティア基金ホームページの「教職員の方によるご寄附について」にアクセスしてください。
https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff.html

①給与からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書（兼・給与口座からの引落依頼書）」をダウンロードし、ご記入の上、卒業生・基金室基金事務担当に提出してください。

②郵便局または銀行への振り込み

卒業生・基金室基金事務担当にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、卒業生・基金室基金事務担当にご持参ください。
申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書（教職員現金用）」をダウンロードしてご記入いただくか、卒業生・基金室基金事務担当にもご用意していますので、お越しいただいてからご記入いただくことも可能です。

④クレジットカード決済・コンビニ決済でのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ
（https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi）の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ　卒業生・基金室基金事務担当（事務局・学内電話　2017）

（社会共創部広報課）

令和4年度 第1回部局・分野横断技術交流会「分析時の困りごと解決！異分野交流で未知の装置不調原因物質の正体を探る」を開催

令和4年7月～同5年2月にかけて、部局・分野横断技術交流会「分析時の困りごと解決！異分野交流で未知の装置不調原因物質の正体を探る」を開催しました。

本技術交流会は技術職員が自ら企画、運営、講義を行い、スキルの継承・伝達・強化を図り、また異分野の技術職員と技術を通して交流することで、技術職員の全学的な人材交流・技術情報交流・技術強化を促すことを目的とした北大コアファシリティ構想研究支援人材育成プログラム、マルチスキル人材育成プロジェクトの事業として行われました。

分析装置を取り扱う技術職員は、日々の業務内で起こる些細な発見を見逃さずに記録に留め、装置の力を最大限に活用して研究へ寄与するデータを提供できるよう日々鍛錬しています。装置内汚染やパーツの物理的破損など様々なトラブルが起こる中で、トラブルを未然に防ぎ、円滑な研究支援体制を整えるのも技術職員の仕事ですが、経験の範囲内でトラブル解決するか、装置メーカー担当者にヘルプを頼む事が多いのが現状です。一方で、本学の技術職員ネットワークを駆使することにより解決の近道が見つかる事も多く、部局横断的な活動が望まれていました。今回、有機微量元素分析装置の利用時に起きたトラブルの原因と考えられる未知物質を題材にし、その組成や生成原因などを共同で解明するプロセスを通して互いの分析技術や知見を共有し、異分野ネットワークによる研究支援力強化に資する事を目的とした交流会を実施しました。

初めに分析対象についての説明を行いました。次に参加者がそれぞれ担当している分析装置の情報を照らし合わせ、破壊・非破壊分析か、あるいは大気中・真空中での分析となるか、前・後処理の有無などを含めディスカッションを行い、分析方法の方針を固めました。その後、ラウンドロビン・テストの要領で蛍光X線分析、走査電子顕微鏡、有機・無機質量分析などを行いました。

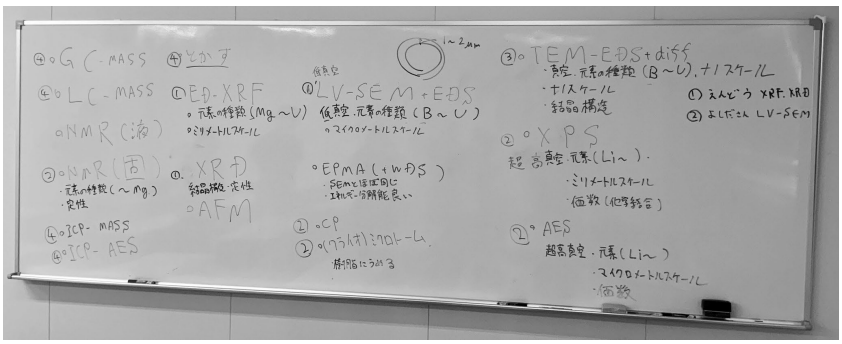
本交流会は、理学研究院、工学研究院、触媒科学研究所、創成研究機構に所属している分析業務担当の技術職員5名が参加しました。当初は、苦労せずに分析して終わるのではないかと見込んでいましたが、夾雑物の状況などから一筋縄ではいかず、分析業務の奥深さを実感しました。また、本交流会をきっかけに、日々の業務において担当部署で対応できない内容についても相談可能な相手ができたことは、今後の業務にも繋がるものと考えています。

本技術交流会は、コーディネーターとなった技術職員からも、試行錯誤しながら準備したことは、何事にも代えがたい貴重な経験になったという感想が聞かれ、本事業の目的に寄与できました。また、分析検体の前処理にご協力いただきました、理学研究院・薄片技術室には厚く御礼申し上げます。

コーディネーター：
工学研究院（令和4年7月当時）　遠堂敬史
創成研究機構　武田希美
創成研究機構　徳光　藍
創成研究機構　岡　征子

（技術支援本部）

初回打合せ

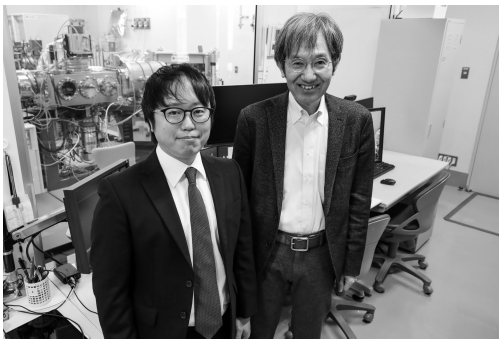


分析方針についてのディスカッション

創成科学研究棟にて報道関係者向け説明会を実施 川﨑教行准教授（理学研究院）、臼本尚義教授（創成研究機構／理学研究院）が登壇

12月16日（金）、創成科学研究棟にて報道関係者向け説明会を実施し、川﨑教行准教授（理学研究院）、臼本尚義教授（創成研究機構／理学研究院）が、Science Advancesに掲載された、はやぶさ2プロジェクトの最新の研究成果について説明しました。JAXAの探査機はやぶさ2が採取した小惑星リュウグウのかけらを当機構の同位体顕微鏡などを使って分析したところ、リュウグウは彗星の近くで誕生したことが明らかになりました。説明会には報道機関4社が訪れ、多数の新聞やニュース番組、ウェブ記事などで取り上げられました。

（創成研究機構）



説明会後、同位体顕微鏡（左奥）の前で笑顔を見せる川﨑准教授（左）と臼本教授（右）（撮影：広報課 学術国際広報担当）

同位体顕微鏡を撮影する報道関係者

説明会の様子

研究成果の詳細については当機構のウェブサイトをご覧ください。

小惑星リュウグウは彗星の近くで生まれた
https://www.cris.hokudai.ac.jp/news/3432

創成研究機構ワクチン研究開発拠点が人獣共通感染症国際共同研究所と合同セミナーを開催

創成研究機構ワクチン研究開発拠点は、2月28日（火）、人獣共通感染症国際共同研究所と合同で対面とオンラインのハイブリッド形式によるセミナー"Immune responses to viral infection and vaccination in humans and animal model"を開催しました。

本セミナーは、ウイルス性呼吸器感染症に対する細胞性免疫解析のエキスパートであり、特にCOVID-19患者からの検体を免疫学的に解析した結果を世界で初めて論文発表されたメルボルン大学のKatherine Kedzierska教授（ワクチン研究開発拠点・人獣共通国際共同研究所客員教授）をはじめ、同大学Brendon Chua上級研究員、Oanh Nguyen上級研究員及びLouise Rowntree研究員をお招きして、ウイルス感染に対する宿主生体の免疫応答を詳細に解析した結果を発表いただきました。

総勢33名と多くの方にご参加いただき、活発な質疑応答が交わされるなど、充実した内容となりました。

（創成研究機構ワクチン研究開発拠点・人獣共通感染症国際共同研究所）

会場の様子

澤拠点長による挨拶

Kedzierska教授による研究発表

質疑応答の様子

日本初！デンマーク発スタートアップイベント「TechBBQ SAPPORO」を開催

1月27日（金）に日本で初開催となるスタートアップイベントTechBBQ SAPPOROが開催されました。TechBBQはデンマークで生まれたスタートアップイベントで、北欧諸国を中心に欧州全域からスタートアップ、スケールアップ、アクセラレーター、VCやビジネス・エンジェルが集結するイベントです。令和3年は6,500人以上が参加登録をしました。この度、ジェトロ北海道、デンマークのTechBBQチームが共催し、札幌市のシンボルである札幌テレビ塔にて、スピンオフイベントのTechBBQ SAPPOROを開催しました。産学地域協働推進機構は、サポーターとして参加し、学生ボランティアと共にイベント運営の支援を行いました。当日は、13カ国から合計180人以上が参加し、熱気あふれる大盛況のイベントとなりました。

大都市から離れた地域でのエコシステム形成をテーマにしたパネルディスカッション「Small Ecosystems, Big Potential: The Nordic/Hokkaido Way」や、「AgriFood Tech」、「Travel Tech」など北海道に関連が強いテーマでのトークセッションなどが行われました。北海道大学の学生4名が登壇し、学生の目からみたスタートアップエコシステムについて語った「Student driven ecosystem」のセッションでは、「札幌のみに情報や機会が集約してしまうと北海道全域にチャンスが広がらない。」「北海道から海外や東京などに経験を獲得しに行こうとすると、移動費を稼ぐためにアルバイトをしなくてはならず、勉強する時間が削られてしまい、スタートアップの根幹となる研究開発に必要な基礎知識が身につかなくなってしまう。移動費などの支援が、もっとあると嬉しい。」「起業やスタートアップをあまり知らない学生が、興味を持つきっかけとなるような取り組みがあると実際に行動する人がもっと生まれるのではないか。」など学生ならではの実体験をもとにした視点でスタートアップエコシステム創出について様々な議論が行われました。登壇者の一人として参加した工学部環境社会工学科資源循環コース2年の武田理熙さんは、「今回のトークセッションでは、実際に起業を進めている他の学生の様々な声を聞くことができ、とても良い経験になりました。北海道全体の学生起業について考えるのであれば、札幌以外の地域の学生も交えながら、それぞれの地域の特性を相互理解した上で意見交換をしていくことが必要だと全体を通して感じました。また、北海道以外の地域で学生の起業支援を行っている方と、セッション後の交流を通して、意見交換や情報の共有をすることができたことも私にとって大変有意義でした。」との感想を述べています。

北海道大学や北海道情報大学などからボランティアとして参加した学生スタッフは、商談や交流を深めるためのネットワーキング時の通訳サポートや受付業務、ゲストのアテンドなどを担当し、活躍をみせました。会場では、海外市場を目指す国内企業と、北海道市場参入に取り組む海外企業のピッチイベントも行われ、参加学生にとっても、海外スタートアップのカルチャーを知る貴重な機会となりました。

（産学・地域協働推進機構）

ピッチイベントの様子

会場では多くのネットワークが生まれた

海外からも多くの参加者が訪れた

学生ボランティアを含む運営スタッフ

nano tech 2023展示会で最新のナノテク研究成果をアピール！

産学・地域協働推進機構は、2月1日（水）～3日（金）に東京ビッグサイトで開催されたnano tech 2023に出展しました。

この展示会は、来場者の約半数がR&D（Research & Development）関係者が占めるため、研究開発に直接かかわる方々へ研究成果をアピールすることができ、新規市場開拓や新規事業のパートナー獲得に最適な展示会となっております。

当機構のブースでは、6つのnano tech関連シーズを展示しました。

1. 「目的に応じた微粒子凝集のためのタンパク質デザイン」
   工学研究院 環境循環システム部門
   中島一紀准教授
2. 「プリンテッドエレクトロニクスに革命を起こす結晶構造・酸化状態を制御した低温焼成用銅ナノ粒子ペースト」
   工学研究院 材料科学部門
   米澤　徹教授
3. 「環状アルキレングリコールによる表面修飾、ナノ炭素材料への応用」
   工学研究院 応用化学部門
   山本拓矢准教授
4. 「結晶中で光情報を伝達するフォトニック分子列車」
   工学研究院 応用化学部門
   長谷川靖哉教授
5. 「CO2還元電極用触媒」
   工学研究院 応用化学部門
   忠永清治教授
6. 「保護酸化物層による結晶性酸化物シートのクラック抑制」
   電子科学研究所 物質科学研究部門
   片山　司准教授

今年度の全来場者数は、31,137人と前年の3倍もの来場者数となり、大盛況のもと、北大ブースでは研究代表者によるプレゼン動画によるアピールやサンプルデモ展示を行いました。その結果、約270名の方との名刺交換及び共同研究等に関する具体的な相談が行われました。

産学・地域協働推進機構では、今後も民間企業等との様々なマッチングの企画を行いながら、産学連携活動を推進してまいります。

（産学・地域協働推進機構）

産学・地域協働推進機構ブースの様子

来場者に説明する米澤教授（右）

SCSK北海道社とオープンイノベーションプログラム「ハッカソン」を開催

SCSK北海道株式会社と協働しオープンイノベーションコミュニティの創出を目的とした取り組みの一環として、プロジェクト学習「ハッカソン」を実施いたしました。1月21日（土）に始まった本取り組みは、約1か月間のプログラムを経て2月19日（日）に最終発表を迎えました。

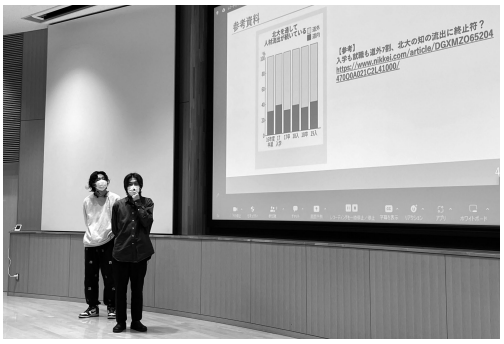
ハッカソンとは、ハック（Hack）とマラソン（Marathon）を掛け合わせて造られた造語で、特定のテーマを決めて、アイデアを出し合い、それを表現・実践するためのソフトウェアを短期間で開発するイベントのことを指します。今回、北海道Society5.0をテーマとし、暮らし、産業、行政、データ利活用、基盤整備などの観点から、最も自分たちの関心の高いテーマをチームで選択し、デザインシンキングの手法を用いてアイデアを考案しました。身近な大学受験などの教育問題に取り組むチーム、北海道ならではの飲食店や郷土料理の検索サービスを考案したチーム、留学生や起業を目指す学生向けの情報支援サービスを開発するチーム、社会課題であるシングルマザーの生活支援に切り込むチームなど、幅広いテーマが設定されました。参加者は北海道大学の学部生・大学院生を中心に、はこだて未来大学の学生、道内公立高校の高校生、社会人など多岐にわたるメンバーが参加しました。アイデア考案が得意なメンバー、プログラミングのスキルが高いメンバー、プレゼンテーションが得意なメンバーなど、それぞれの特性を活かして6チームが最終発表を行いました。プロジェクト学習ならではのチームビルディングの難しさや、メンバーで相互に助け合うという共創活動の経験を通じて、発表を迎えたチームメンバーたちは、堂々とプレゼンテーションを行いました。プレゼンテーションでは、背景にある課題や考案したアイデアの詳細、MVP（ミニマム・バイアブル・プロダクト：完成品ではなく実用最小限の価値を提供するプロダクトのこと）のデモ、苦労した点や今後の展望などが共有されました。

最終発表には、SCSK北海道株式会社の馬場　亨常務執行役員、同事業推進部の土作正敏部長、株式会社ゲートの国井美佐代表取締役、北海道大学情報科学研究院の山下倫央准教授、産学地域協働推進機構の本間　篤部門長に講評者として参加いただきました。アイデアの創造性、プロダクトデモの完成度、プレゼンテーションの姿勢など幅広い観点からチームにアドバイスが送られました。その後の実装に向けて開発を続けたいと希望するチームもあり、産学連携によるオープンイノベーションの一つの形として、本プログラムが有効に機能したと言えます。

（産学・地域協働推進機構）

講評者からのアドバイスも多数

プレゼンテーションを行う様子



プレゼンテーションを行う様子

講義の様子

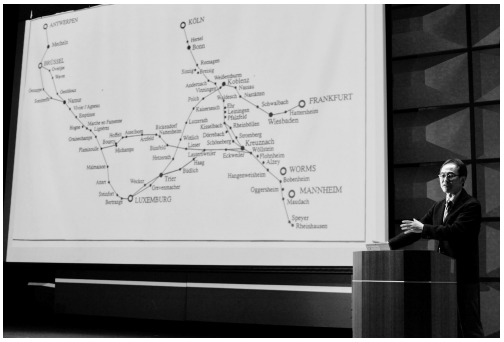
大学院教育推進機構リカレント教育推進部が北大道新アカデミー告知動画を制作

2月13日（月）、クラーク会館講堂にて、大学院教育推進機構リカレント教育推進部が北大道新アカデミーの告知動画の撮影を行いました。

北大道新アカデミーは2017年に北海道大学と北海道新聞社の間で締結された包括連携協定に基づいて行われており、2023年度より、リカレント教育推進部の下で、本学のリカレント教育プログラムの一つとしてリデザインして実施されます。このことを告知するため動画を制作することとなりました。

本動画の制作は札幌在住の映像作家・写真家の北川陽稔氏に依頼しました。この日に行われた、山本文彦大学院教育推進機構長による模擬講義の撮影には、藤井　篤道新文化センター代表取締役社長、稲塚寛子道新文化センター統括本部長も見学に訪れ、5月から始まる北大道新アカデミーへの期待を語りました。

（リカレント教育推進部）



山本大学院教育推進機構長による模擬講義の様子

左より、稲塚道新文化センター統括本部長、藤井道新文化センター代表取締役社長、山本大学院教育推進機構長、川本思心リカレント教育推進部長、種村　剛特任教授

プラス・ミュージアム・プログラム 2022年度「クロージングフェスタ」を開催

本プログラムは、文化庁「大学における文化芸術推進事業」の助成を受け、令和4年度からはじまった3か年計画のプログラムです。キックオフシンポジウム「ミュージアム発の幸福論」から始まり、その後「対話と共生」「モノと情報のリスクマネジメント」「財政をめぐるブラックボックス」「評価の呪縛からの脱出」をテーマに公開授業・シンポジウム、工学研究院と文学研究院とのクロストークを開催しました。

2月11日（土）～12日（日）の両日、人文・社会科学総合教育研究棟において、今年度最後のイベントとして「対話と寄り添い」をテーマに11日に講演と対談を、12日に「地域とともにあるミュージアムのあり方を考える」情報交換会を開催しました。

初めに、本学を代表して北海道大学文学研究院の藤田　健研究院長が挨拶をしました。続いて神戸大学・流通科学大学の石井淳蔵名誉教授が「地域ブランドは進化する」をテーマに講演し、「ブランド」とは企業だけで創るのではなく、お客さんもその価値を支配していること。ブランドには二つの種類があり、ここで注目するブランドはアイデンティティが変容するブランドで、その代表として「無印良品」のブランド形成過程を説明しました。本題である「地域ブランド」では、変容するブランドの代表として小布施町（長野県）の事例を挙げました。これを「進化するブランド」と名づけ、そのブランド「らしさ」が基軸になっていて、参加者が増えたり、変わったりするたびにアイデンティティが変わること。加えて、常になにか異質の要素が入ってくるのを待っていて、それが「らしさ」に沿って消費されるのが特徴と話しました。

次に明治大学の源由理子教授は、「評価における対話と共創のマネジメント～協働型評価の取り組みから～」と題して、事業のステークホルダーが評価に参画して、対話と合意形成のプロセスをともにする意義について話しました。対話と合意形成を繰り返すことの重要性とともに、このような協働型評価を実施し続けることで、組織構成員の動機づけや組織自体のイノベーションの取り組みにつながると説明しました。講演終了後に本学文学研究院の佐々木亨教授の司会進行で、お二人が対談をしました。11日の最後には、本プログラム代表である本学文学研究院の今村信隆准教授が、主催者としてのご挨拶と今後のプログラムについてアナウンスしました。

12日の情報交換会は、北海道内のさまざまなミュージアム関係者など18名を招待して行われました。この目的は、ミュージアムが直面する地域課題の特殊性や共通点を共有することであり、この成果は次年度以降に扱う課題を洗い出すためにも活用します。

情報交換会の企画を担当した本学文学研究院の卓　彦伶特任教授は、事前に「観光」、「記録と記憶」、「社会包摂・文化多様性」の三つのトピックを設定し、参加者を専門分野や所属によって四つのグループに分けました。参加者は自己紹介、これまで携わってきた博物館事業の内容と、所属グループのトピックに関する思いや感想を述べた後、グループディスカッションを通じて、今後新たに実践したい事業企画を検討し、発表しました。

今年度、本プログラムで開催したイベントでは、新型コロナウイルスの影響により、オンライン参加の比率の方が高くなりました。遠方からの参加が容易になった一方で、人と人が直接交流する機会が少なくなりました。そうした中で、道内のさまざまな地域で活躍しているミュージアム関係者が同じ空間に集まり、声や表情、動作を通してお互いの経験と課題を共有するこの会は、非常に貴重な場になりました。

プログラムのHP
https://www.let.hokudai.ac.jp/general/plusm

（文学研究院）

講演者の石井氏（2/11）

講演者の源氏（2/11）

「情報交換会」の進行を説明する卓特任准教授（2/12）

グループディスカッションの成果を発表する情報交換会の参加者（2/12）

文学部書香の森展示スペースにて4本の企画展示を開催

令和4年3月1日（火）から同5年5月12日（金）まで、文学部書香の森展示スペースにて、大学院生が主体となって立案・制作した4本の企画展示を行っています。書香の森は、文学研究院の教員が手がけた書籍を紹介したり、様々な企画展示を行ったりするために、これまでも用いられてきた場所です。この場所をいっそう有効に活用するために、新たに「書香の森展示ワーキンググループ」（座長・谷本晃久教授）を設け、文学院に所属する大学院生の研究を学内外に向けて発信することを目指しました。

最初の企画展『開講、木彫り熊概論』（令和4年3月1日～7月1日）は、文学院博物館学研究室修士課程の田村実咲さんの修士論文をもとに、同研究室が主体となって制作しました。かつて北海道を代表する土産品として親しまれ、今また静かなブームを巻き起こしている木彫り熊の魅力に迫るという内容でした。展示には、各地の製作者にインタビューを行ってきた田村さんならではの視点がふんだんに盛り込まれ、東京の出版社から問い合わせがあったり、遠方から展示を観に来る方がいたりと、多くの反響をいただきました。

『GAME START ゲーム展示を攻略せよ』（令和4年7月8日～10月21日）は、同じく文学院博物館学研究室博士後期課程の寺農織苑さんの研究に基づく企画です。全国の1,751館のミュージアムを対象にアンケート調査を試みた研究結果を紹介しました。展示では、実際に展示されることが多かったゲーム機やゲームソフトの実物を紹介するとともに、調査結果を抜粋したグラフを壁面全体に展開し、ゲーム文化の確かな存在感を印象づけました。

「『深』動物撮影 関係論 ―写真家 高橋忠照と出会った動物たち」（令和4年10月28日～令和5年1月27日）は、文学院文化人類学研究室修士課程の中村香音さんの研究から生まれました。自衛隊の元スナイパーという異色の経歴でも知られ、多くのメディアにも出演する動物写真家・高橋忠照氏に焦点を当てて、撮影者である人間と動物との関係を問い直す企画です。なお、展示を紹介するパンフレットの制作、オンライン・ギャラリートークの実施、北大総合博物館のミュージアムショップでの関連グッズ販売など、展示以外にもひろがりを見せました。

『連環画研究・増刊号　ようこそ〈連環画〉の世界へ』（令和5年2月13日～5月12日）は、文学院中国文化論研究室の武田雅哉名誉教授のコレクションから、連環画の歴史や魅力を紹介するものです。連環画とは20世紀初頭に上海で生まれた手のひらサイズの劇画本を指します。武田名誉教授はこの連環画研究の第一人者であり、国内外の研究者とともに研究誌『連環画研究』を刊行してきました。今回は、雑誌ではなく展示というかたちで『連環画研究』の増刊号を発信することを目指し、中国文化論研究室博士後期課程の熊　征さんが中心になって展示デザインや解説文を練り上げました。連環画の歴史や魅力を伝える、賑やかで充実した展示となっております。

（分学院・文学研究院・文学部）

「GAME START」展

展示作業（「開講、木彫り熊概論」展）

展示から生まれた冊子（「『深』動物撮影関係論」展）

「連環画研究・増刊号」展

スラブ・ユーラシア研究センター国際シンポジウム「ウクライナとロシアの生存戦略：開戦から1年を迎えて」開催

スラブ・ユーラシア研究センターは、2月21日（火）～22日（水）に、国際シンポジウム“Survival Strategies of Ukraine and Russia: A Year On from the Outbreak of War”を対面・オンライン併用で開催しました。これは、本センターの中期プロジェクト「国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築」の全体集会を兼ねたものでした。

ロシアによるウクライナ侵略戦争は、独立国家とその国民、さらには人類社会の生存が、決して万全に保証されたものではないことを、あらわにしました。この戦争による犠牲は極めて深刻なものですが、ウクライナ国民の団結とそれに伴うさまざまな文化・社会活動、欧米諸国や日本によるウクライナ支援を含む国際関係の活性化など、新たな動きも生まれ、生存戦略研究が取り組むべき多くのテーマが現れています。

生存戦略研究プラットフォーム全体集会の企画としては、グローバル冷戦史の大家であるオッド・アルネ・ウェスタッド教授による中国帝国近現代史に関する講演後、センターと交流協定のあるユニバーシティ・カレッジ・ロンドンの研究者たちを迎えてロシア研究の方向性を議論するラウンドテーブルを開催しました。さらに、生存戦略研究の各部門の代表者らによるブレーンストーミング・セッションを開き、今回の戦争を受けて国際政治、歴史、文化の各方面から生存戦略を研究する方法について議論しました。

ウクライナとロシアの生存戦略に関するシンポジウム本体は1日目の夕方から始まり、第1セッションでは、ウクライナ政治について以前から指摘されてきた、民主主義の脆弱性、財閥の影響、腐敗といった問題が戦時下でどのような状況にあり、どのような解決が考えられるかを議論しました。2日目の第2セッションではロシアの人口政策やガス輸出と戦争の関係、また、貿易統計が発表されなくなった状況での推計の方法を取り上げました。第3セッションでは、2014年以来部分的な戦争状況に置かれてきたウクライナでの詩人や映画人の活動に光を当て、報告者がドンバスの荒廃に関する詩を読みながら涙で声をつまらせる場面もありました。第4セッションではウクライナにおける歴史研究の今後の方向性を、特に世界史やヨーロッパ史と関連づけながら議論しましたが、キーウからオンラインで参加した報告者の一人が空襲警報によりシェルターに避難し、緊迫した状況が伝わってきました。最後の総合討論では、これまでのロシア研究者によるウクライナ認識の浅さに関する辛口の問題提起を受けて、今後の研究の方向性を活発に議論しました。

今回の戦争は研究者の間でも意見の相違を生んでいますが、このシンポジウムでは、ウクライナとロシアの状況を多方向から捉え、異なる解釈がありうることを意識しつつ建設的な議論ができました。コロナ対策のため対面参加者数を制限しながらの開催でしたが、参加人数（実数）は対面とオンラインを合わせて151名に上りました。

（スラブ・ユーラシア研究センター）

戦時下のウクライナ女性詩人たちに関する報告

充実した議論を終えた参加者たち

先端生命科学研究院でFDSD研修会「総会2022」を開催

先端生命科学研究院では2月13日（月）に、令和4年度FDSD研修会「総会2022」をオンライン開催しました。

今年度も教育・研究担当の全教員、研究室の事務・技術職員、理学・生命科学事務部職員を対象とし、同研究院の諸研究・教育活動報告を実施しました（出席者総数95名（研究院等教職員59名、事務部36名））。

今年度のプログラムは3部構成で、（1）研究院・学院・学部の活動報告、（2）理学・生命科学事務部への質疑・応答、（3）SDGsに関するFD講演が行われました。

プログラム（1）では、研究院の概要、研究戦略室の活動（外部資金獲得支援・広報支援）、次世代物質生命科学研究センターにおける活動（外国籍教職員・留学生対象の医療支援サービスの導入等）、ソフトマター国際連携ユニットの活動、博士後期課程進学率向上への取り組み、IGP（International Graduate Program）の活動について、先端生命科学研究院の門出健次研究院長から説明がありました。

プログラム（2）では、「理学・生命科学事務部へ聞きたいこと！お答えします！」と題し、教職員から寄せられた疑問・質問に対して、理学・生命科学事務部庶務担当の渡邉秀敏係長が回答しました。

プログラム（3）では、FD講演「北海道大学のSDGs達成への取り組みと教育研究活動」（理学研究院と共同開催）が行われました。本学発展の歴史とSDGsとの関わり、本学でのSDGs教育研究活動の現状について、横田　篤理事・副学長、出村　誠総長補佐から紹介がありました。

終了後のアンケートでは、1年間の活動状況が理解でき有益だったとの意見が多く寄せられました。総会のオンライン開催が定着してきた一方で、対面での意見交換の場を望む声もありました。研究院に関わる教職員が情報共有することで、今後の業務改善に繋げられる有意義な時間となりました。

（生命科学院・先端生命科学研究院）

門出研究院長（中央奥）による活動報告の様子

令和5年度薬学実務実習開始セレモニーを挙行

薬学部では、2月7日（火）に令和5年度薬学実務実習開始セレモニー「臨床現場へあがるための心得」を挙行しました。

この式は、薬学科学生が実務実習（病院実習・薬局実習）に臨むにあたり毎年実施しているもので、学生は、引き締まった面持ちで参加していました。

式には、木原章雄薬学部長、中川真一教務委員長、実務実習担当教員らが出席し、実務実習の趣旨や学生に期待すること、今年度実施された実務実習をふまえての注意点などとともに、激励の言葉が伝えられました。

受入施設からは、北海道大学病院薬剤部の菅原　満薬剤部長、株式会社アインホールディングスの若林奈美氏、株式会社ツルハの中村文哉氏、株式会社なの花北海道の井野千枝子氏が出席し、臨床の現場・患者さんに直接、接する場で実習に臨む際の心構えなどが伝えられ、学生たちが神妙に聞き入る様子が見られました。

また、木原薬学部長から学生一人ひとりへ実習中着用するネームプレートが手渡され、病院・薬局合わせて5か月に及ぶ実習への壮行となりました。

（薬学研究院・薬学部）

激励の言葉をかける菅原薬剤部長

ネームプレートを手渡す木原薬学部長

熱心に聞き入る学生たち

低温科学研究所がベルリン応用科学大学生命工学部と部局間交流協定を締結

低温科学研究所は、2月17日（金）にベルリン応用科学大学生命工学部と部局間交流協定を締結し、調印式を行いました。調印式は、ベルリン応用科学大学で執り行われ、同大学からDiana Graubaum学部長ら4名、本研究所からは渡部直樹所長、福井　学教授ら4名が出席しました。

ベルリン応用科学大学は、1971年に設立されたドイツ最大の応用科学大学の一つで、応用工学、自然科学、社会科学などあらゆる領域に関する研究活動を行う研究機関です。また、今回の協定については、本研究所の福井教授と同大学のMia Terashima教授の共同研究を契機として取り交わされました。

調印式の後には、互いの研究状況に関する活発な意見交換が行われました。今後、両機関の間で更なる共同研究活動の発展など、積極的な交流連携が期待されます。

（低温科学研究所）

協定書を取り交わすGraubaum学部長（左）と渡部所長（右）

調印式における関係者集合写真

定年を迎えるにあたって

本年3月31日限りで定年を迎える方々のお言葉と略歴を紹介します。

法学研究科教授
権左（ごんざ）　武志（たけし）　氏

1993年にスタッフに採用されて以来、本学には30年間お世話になりました。企業組織に組み込まれるのでなく、自分の力で創造的仕事を残したく、北大大学院に進学しました。大学時代の授業では聞けなかったヘーゲル以後の政治思想史に挑戦し、定年までにヘーゲル政治思想に関する研究書・新書とルソー以後の政治思想史に関する選書を公刊し、世の評価を受けることができて、幸せに思います。名だたるドイツ人研究者と在外研究や研究者招聘で交流できたのも長く思い出に残るでしょう。

この間、昭和・平成・令和の三つの時代にわたる大学の変遷を経験しました。家父長制の濃厚な昭和の大学が、平成の幕開けと冷戦終結と共に解体し始め、独法化と大学改革と共に新自由主義的に再編成される現場に立ち会いました。「造反有理」を叫んだ団塊世代が、20年前に競争原理とグローバル化とガバナンスを唱えた異様な光景は忘れないでしょう。学術の発展には創造的革新が不可欠ですが、今後の大学の発展には、改善すべき現実はなんであり、保存すべき原理は何なのか、両者の判断を誤らないようにお願いできればと思います。

この激動の時代の中でお世話になった同僚の方々や事務の方々には、この場を借りて感謝申し上げます。

略　歴

生　年　月　日	昭和34年10月7日
昭和59年 3月	東京大学法学部卒業
昭和61年 3月	北海道大学大学院法学研究科修士課程修了
平成元年 4月	北海道大学大学院法学研究科博士課程単位修得退学
平成元年 5月	北海道大学法学部助手
平成 5年 6月	博士（法学）（北海道大学）
平成 5年 8月	北海道大学法学部助教授
平成10年 7月	北海道大学法学部教授
平成12年 4月	北海道大学大学院法学研究科教授
平成21年 4月	北海道大学大学院公共政策学連携研究部教授
平成23年 4月	北海道大学大学院法学研究科教授

水産科学研究院教授
川合（かわい）　祐史（ゆうじ）　氏

昭和62年6月に北海道大学水産学部水産食品学科食品化学第一講座に助手として戻り、魚肉タンパク質の加工機能特性に関わり、その後、食品製造学講座に異動し、水産発酵食品、微生物の機能利用、水の物性を守備範囲に加えました。さらに、学部・大学院の機構改変により所属講座・分野は、食品機能化学講座、水圏食糧科学講座、水産資源利用学分野、水産食品科学分野と変遷し、研究室は食品製造学に食品衛生学を吸収合併し、食品保蔵学を基盤として微生物制御まで守備範囲を広げ、ファインプレーはありませんでしたが、35年間このフィールドに立っていることができました。

部局運営では、大学院の定員改組、英語による大学院教育システムの充実、教員人事システムの改変など、大きな課題に取り組む機会をいただきました。そのほか、拠点大学方式による日韓水産学術交流などで、多くの海外研究者と縁を結べたことは、想定外のかけがえのない経験となりました。キャリア支援も10年間担当し、多くの同窓生からご高配を賜りました。

最後に、教職員、学生をはじめ、ご支援、ご協力、ご厚情を賜りました皆様に深く感謝申し上げます。母校、北海道大学の益々の発展を祈念いたします。

略　歴

生　年　月　日	昭和33年1月6日
昭和55年 3月	北海道大学水産学部卒業
昭和57年 3月	北海道大学大学院水産学研究科水産食品学専攻修士課程修了
昭和57年 4月 昭和62年 5月	北海道技術吏員研究職員（網走水産試験場）
昭和62年 6月	北海道大学水産学部助手
平成 6年 4月	北海道大学水産学部講師
平成 7年12月	博士（水産学）（北海道大学）
平成 8年 5月	北海道大学水産学部助教授
平成12年 4月	北海道大学大学院水産科学研究科助教授
平成17年 4月	北海道大学大学院水産科学研究院教授
平成28年 4月 平成30年 3月	北海道大学教育研究評議会評議員
平成30年 4月 令和 4年 3月	北海道大学大学院水産科学研究院副研究院長

水産科学研究院教授

木村（きむら）　暢夫（のぶお）　氏

昭和51年に北海道大学に入学してから、在外研究の期間を含め47年、実に半世紀近く北海道大学にお世話になりました。この間、私を育てていただきました北海道大学、お世話になりました教職員、ならびに諸先輩や研究室の学生の皆様に心から感謝いたします。

大学の先生の特権は、「人生で一番自由で発想力豊かな学生から、ゼミや日常の会話等を通し新たな刺激と若いエネルギーを分けてもらえる」ことで、この時間を共有することで共に成長することができる。これは先代の教授からの受け売りですが、学生のころから聞かされた言葉を、私も改めて実感しています。奉職してから約37年、多くの学生・研究者に囲まれ充実した時間を過ごさせていただきました。

地元函館出身だったこともあり、練習船「おしょろ丸」の南方航海に憧れ北大の門をくぐり、当時多発する漁船の海難事故に対し漁船漁業の安全性向上がライフワークとなりました。乗り物に弱い私でしたが、事故に結びつく実操業時の船体動揺データを計測するため荒天時漁船に乗船してきました。これらの成果が、少しでも漁船の海難事故減少に繋がり、安全性向上に貢献できていたら幸いです。また、在職中に水産学部附属練習船2隻の代船建造に携わることが出来たことは、漁船研究を行ってきた私にとって大変幸せな巡り合わせとなりました。

最後に、北海道大学の益々の発展を祈念いたしますとともに、皆様方のご健勝とご活躍をお祈りして、定年のご挨拶とさせていただきます。

略　歴

生　年　月　日	昭和32年11月9日
昭和55年　3月	北海道大学水産学部卒業
昭和56年　3月	北海道大学水産学部特設専攻科修了
昭和59年　3月	北海道大学大学院水産学研究科漁業学専攻修士課程修了
昭和61年　4月	北海道大学大学院水産学研究科漁業学専攻博士課程中退
昭和61年　5月	北海道大学水産学部助手
平成　2年　6月	水産学博士（北海道大学）
平成　3年　4月	北海道大学水産学部助教授
平成12年　4月	北海道大学大学院水産科学研究科助教授
平成17年　4月	北海道大学大学院水産科学研究院教授
平成26年　4月 平成30年　3月	北海道大学大学院水産科学研究院副研究院長
平成30年　4月 令和　4年　3月	北海道大学大学院水産科学研究院長・ 大学院水産科学院長・水産学部長

地球環境科学研究院教授

大原（おおはら）　雅（まさし）　氏

本当にお世話になり、ありがとうございました。多くの方々に助けて頂き、自分なりにいっぱい、いっぱい走り続けました。

歳を取って良かったことは、辛いことや嫌なことはすぐに忘れてしまうことです。その一方、嬉しかったこと、ありがたかったことへの想いは深まりました。研究室の片付けをしながら、日々、いろいろなことが去来します。この文章を書きながら思い浮かんだことは、地道なフィールドワークが重要な当研究室で、学生たちが大きな事故なく無事にフィールドワークを行ってくれたことです。大原研では、まだ公衆電話しかない頃から、長期間でも日帰りでも「安全確認」として、その日の調査が終了すると必ず夜8時までに研究室に（今では携帯に）電話をもらっていました。このシステムは、メール、LINEなど便利なツールが出てきても変わりませんでした。やはり、ハードな調査に出ている学生と留守番の学生間での「今日の調査無事に終了です - お疲れさま」の生の声のやり取りが、その日の疲れをとり、また翌日の元気になったことと信じています。単純なことですが、互いが互いのことを思いやる、そんなことが35年間繰り返されてきました。

退職後は、今一度、皆様にお世話になったことを振り返り、感謝の気持ちを持って過ごしたいと思っております。

略　歴

生　年　月　日	昭和33年2月1日
昭和55年　3月	北海道大学農学部卒業
昭和57年　3月	北海道大学大学院環境科学研究科環境保全学専攻修了
昭和60年　4月	日本学術振興会奨励研究員採用
昭和62年　7月	北海道大学農学部助手
平成　2年　3月	理学博士（京都大学）
平成　7年　8月	北海道大学農学部助教授
平成　8年11月	東京大学大学院総合文化研究科助教授
平成12年　3月	北海道大学大学院地球環境科学研究科助教授
平成15年　4月	北海道大学大学院地球環境科学研究科教授
平成17年　4月	北海道大学大学院地球環境科学研究院教授
平成27年10月	北海道大学大学院地球環境科学研究院副研究院長・ 環境科学院副学院長
平成29年　9月	同上退任
平成29年10月	北海道大学大学院地球環境科学研究院研究院長・環境科学院学院長
令和　3年　9月	同上退任

理学研究院教授

岩崎（いわさき）　克則（かつのり）　氏

おかげさまで、この度、無事に定年退職を迎えることができました。大学院を修了後、教員として充実した38年間を送らせていただきました。兵庫県の田舎で生まれ、大学入学時に東京へ移住、その後に福岡へ異動、そして直近の13年間を札幌で過ごしました。本州では関西と関東に、次いで九州で、そして最後は北海道へと移り、また若い頃には外国滞在もさせていただき、いろいろな場所を体験することができました。それぞれの土地にそれぞれの良さがあり、楽しく過ごすことができました。この間、数学についていろいろと学ぶことができ、またささやかな発見のよろこびも味わうこともできました。自然科学が外界の自然現象を対象とするのに対して、数学は数・図形・方程式・関数など、人間の内面にある抽象概念を対象としており、諸科学を人間の内面に写し出す鏡のような役割を果たしています。一方で、数学の現象自体は人間とは独立に存在しており、人はそれに出会い発見するだけという感じがいたします。そんな数学の世界をいま少し探検できたら幸いです。定年で一区切りつきますが、特任教員として、もうしばらく北大にお世話になります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

略　歴

生　年　月　日	昭和35年1月9日
昭和58年　3月	東京大学理学部卒業
昭和60年　3月	東京大学大学院理学系研究科修士課程修了
昭和60年　4月	東京大学理学部助手
昭和63年　3月	理学博士（東京大学）
平成　4年　4月	東京大学大学院数理科学研究科助教授
平成　9年　4月	九州大学大学院数理学研究科教授
平成12年　4月	九州大学大学院数理学研究院教授
平成22年　4月	北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授

栄（えい）　伸一郎（しんいちろう）　氏

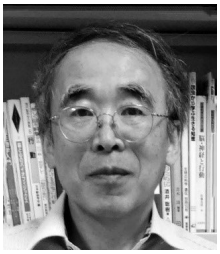
2014年に九州大学より北海道大学に赴任しました。生まれは石川県ですので、略歴をたどると異動幅がほぼ単調増加ですが、京都以降は各場所にほぼ10年ずつ滞在という規則性も見受けられます。北大に赴任するとき、異動幅の規則から、次の異動では国外になるかもしれないと思った一方で、滞在期間の規則から、北大に定年までいることになるかもしれないとも考えました。結果として北大で職歴を終えられることは幸せでした。私の専門は微分方程式であり、終期値問題は初期値問題に比べて格段に難しいことが理論的にわかっています。「研究や生活をどのように収束させるか」という問題は、まさに終期値問題でその困難さを肌で実感する昨今ですが、北大で最後を締めくくることで少しだけ解決できた気になりました。北大は他の赴任先以上に自由であり、懐深く多くのことを許容する雰囲気や、北海道ならではの冬の出張の厳しさと夏の快適さも特別でした。徐々に夏と冬は北海道内に滞在して、出張よりは招聘中心のスタイルになっていきました。これが可能になったのは、北大と北海道の魅力によるところ大で、特に定年間近の身には感謝でした。この素晴らしい経験を共有してくれたスタッフの皆さんや家族の暖かい支えに感謝いたします。

略　歴

生　年　月　日	昭和34年4月2日
昭和57年　3月	京都大学理学部卒業
昭和62年　9月	広島大学大学院理学研究科博士課程後期単位修得退学
昭和62年10月	理学博士　（広島大学）
昭和62年10月	広島大学理学部助手
平成　3年　4月	広島大学理学部講師
平成　4年　4月	横浜市立大学大学院総合理学研究科助教授
平成16年　3月	九州大学大学院数理学研究院教授
平成23年　4月	九州大学マス・フォア・インダストリ研究所教授
平成26年　4月	北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授

水波（みずなみ）　誠（まこと）　氏



私は、昆虫など節足動物の脳を「微小脳（microbrain）」という概念で捉えることを提案し、昆虫を材料にその基本設計原理の解明を目指して生理、形態、行動学的な解析を行い、微小脳の働きに関する理解の進展を目指してきました。平成10－14年に実施された文部科学省科研費特定領域研究「微小脳システムの適応的設計」（代表者高畑雅一）では、計画班班長として無脊椎動物行動の神経機構に関する研究を促進させ、国内外の研究者交流を進展させました。北海道大学などでの大学教育では大学院、学部、全学教育での教育に寄与しました。また日本学術振興会その他の委員として学外・社会的な貢献にも努めました。

主な研究業績としては、節足動物の脳を「微小脳」の概念で捉え、哺乳類の脳「巨大脳」と対比しつつ研究するアプローチを提唱し、微小脳の基本設計原理の解明を目指した研究を進めたことを挙げたいと思います。その結果、昆虫の微小脳は哺乳類の巨大脳とは異なる生き方に最適化された脳との理解に至り、この提案は今日広く受け入れられています。一方、微小脳と巨大脳の情報処理には多くの共通性があることを見出し、異なる系統の脳における情報処理の収斂進化についての理解を深めました。それらの成果により、日本動物学会賞及び日本比較生理生化学賞を受賞しました。

これらの研究成果は、研究室の多数の学生や共同研究者の深い情熱によりもたらされたものです。ご支援をいただいた同僚研究者も含めて深く感謝申し上げます。

略　歴

昭和55年 3月　九州大学理学部生物学科卒業
昭和59年 3月　九州大学大学院理学研究科博士後期課程中退
昭和59年 4月　九州大学理学部助手
昭和62年 4月　理学博士（九州大学）
平成 5年 4月　北海道大学電子科学研究所助教授
平成13年 4月　東北大学大学院生命科学研究科助教授
平成21年 4月　北海道大学大学院先端生命科学研究院教授
平成22年 4月　北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授

石川（いしかわ）　剛郎（ごうお）　氏

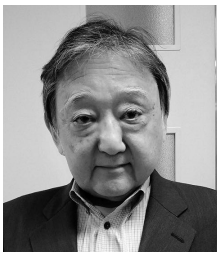
北海道大学に赴任してあっという間に35年経ちました。北大の恵まれた環境で、空気を吸うように自由に好きな数学をさせてもらえたのはとても有り難いことでした。なんとか今まで研究・教育を続けられたこと、その間、教室主任や学振ITP事業を担当する機会を持てたこと、Hokkaido Mathematical Journalの編集長を務められたことなど、すべては周囲の皆様、先輩・同輩・後輩、事務室・図書室のスタッフの全ての方々のお陰だと改めて実感しています。そして何より北大の優秀な学生さん達を指導できる機会を持てたことは大変な喜びでした。当方の能力の問題で、自身の研究については、何だか同じところをぐるぐる巡ってきた気もするし、「胎内めぐり」のように真っ暗な中をそろそろと手探りで歩んで毎日生まれ変わっていただけ、数学という広い世界のほんの一部を周遊する旅の、今も冒険の途中という感じもします。ともかく、定年退職をしても、いままでとあまり変わらずに好きな数学の研究を続けていきたいと思います。そして、改めて「自己実現と社会貢献」を目標に、可能な範囲で数学の発展に貢献し、社会に少しでも恩返しできるよう努力してまいります。いままでありがとうございました。

略　歴

生 年 月 日　昭和32年11月2日
昭和55年 3月　京都大学理学部卒業
昭和60年 3月　京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了
昭和60年 3月　理学博士（京都大学）
昭和60年 4月　奈良女子大学理学部助手
昭和62年 7月　北海道大学理学部講師
平成 2年 4月　北海道大学理学部助教授
平成 7年 4月　北海道大学大学院理学研究科助教授
平成16年10月　北海道大学大学院理学研究科教授
平成18年 4月　北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授

野嵜（のざき）　龍介（りゅうすけ）　氏



1992年3月の着任以来、31年の長きにわたり北大で教育・研究に携わることができました。ここまで続けられたのも、物理教室をはじめ北大教職員学生及び関係者の皆様のご支援のおかげであり、まず初めに心より御礼申し上げます。

実は、私自身、元々北大はもとより北海道には縁もゆかりもありません。ところが、卒業研究から始めて大学院で研究活動に邁進するにつれ周囲に北大関係者が次々と現れ、ケベック大学に勤務するころには国際会議等の会場には必ず北大の研究者が多数おられ、親交を深めるようになりました。会話を深めていくうちに、徐々に北大の校風というか研究環境に一種のあこがれを持つようになりました。気が付くと採用が決まって、とうとう引き込まれたなあと空を見上げたのを思い出します。

在職中の大きな出来事は法人化です。私は私学出身で、外部に頼らないと個人研究費が年間30万円という環境を見てきましたから、運営費交付金が減ることをそれほど大きな問題と考えてはいません。むしろ大学の裁量拡大と引き換えに導入された努力と成果の管理が、大学における教育・研究活動の足を引っ張っているように感じています。

退職後もしばらくは基礎教育や研究で北大にお世話になります。未来を担う若い人たちのためにも、北大にはこれまでと同様、より良い教育や自由な研究活動を行う環境を提供する努力を続けていただきたいと願っております。

略　歴

生　年　月　日	昭和32年12月4日
昭和57年 3月	東海大学理学部卒業
昭和59年 3月	東海大学大学院理学研究科博士課程前期修了
昭和60年 4月	早稲田大学理工学部助手
昭和62年 3月	早稲田大学大学院理工学研究科博士後期課程修了
昭和62年 3月	理学博士（早稲田大学）
昭和63年 5月	ケベック大学博士研究員／研究員
平成 4年 3月	北海道大学理学部助手
平成 5年11月	北海道大学理学部講師
平成 7年 4月	北海道大学大学院理学研究科講師
平成11年 7月	米国商務省標準技術研究所客員研究員
平成12年 7月	
平成15年 3月	北海道大学大学院理学研究科助教授
平成18年 4月	北海道大学大学院理学研究院助教授
平成19年 4月	北海道大学大学院理学研究院准教授
平成29年 7月	北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授

谷岡（たにおか）　勇市郎（ゆういちろう）　氏

北海道大学で20年間、同僚や学生に支えられながら研究・教育生活を送ることができました。私が赴任してすぐ2003年十勝沖地震が発生し、北大での慌ただしい研究生活が始まります。2004年にはスマトラ巨大地震（M9.2）による巨大津波の発生により海外での調査研究が加わり、さらに忙しくなります。そんな中、地震火山研究観測センター長になり、1年も経たないうちに今度は2011年東北地方太平洋沖巨大地震（M9.0）が発生します。津波の研究者としてこの二つの巨大津波の発生を経験し、緊急調査・研究を実施できたことは非常に恵まれていたと言えるかもしれません。しかし、これらの津波災害は非常に多くの犠牲者を伴いました。私たちの研究はこれら多くの犠牲者の上に成り立っている事を心のどこかで感じながら、将来起こる津波災害の軽減に少しでも貢献できる研究を心がけることとなります。この二つの津波災害を契機に世界中で津波観測手法開発や即時予測手法の研究が精力的に実施されていきます。現在では世界唯一の稠密海底地震・津波観測網（S-NET）が日本海溝・千島海溝沿いに整備され、その観測データを災害の軽減に活用するための研究が盛んに実施されてきています。多くの大学院生・学生と共にこれらの研究に関われたことは本当に幸せでした。

略　歴

生　年　月　日	昭和34年5月15日
昭和60年 3月	大阪大学基礎工学部卒業
平成 8年 5月	ミシガン大学大学院博士課程修了
平成 8年 5月	Ph. D.（ミシガン大学）
平成 8年10月	気象研究所地震火山研究部第一研究室研究官
平成12年 4月	気象研究所地震火山研究部第一研究室主任研究官
平成15年 4月	北海道大学大学院理学研究科附属地震火山研究観測センター助教授
平成18年 4月	北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センター助教授
平成19年 4月	北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センター准教授
平成21年 4月	北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センター教授

農学研究院教授

石黒（いしぐろ）　宗秀（むねひで）　氏

平成23年の東日本大震災の直後に、岡山から赴任しました。日本中がこれからどうなるのかと不安な状況での転勤でした。赴任早々に、農学部同窓会誌の寄稿文を読んでいると、クラーク博士がもたらした札幌農学校の教育精神に関する記事がありました。弱い立場の人々に寄り添い理想の世の中を創る志を軸にした随筆でしたが、その後クラーク博士や新渡戸博士の像を身近に眺めつつ、本学の貴重な伝統の背景を心地良く感じながら活動する日々を送りました。最も古い旧帝大ですので、心情的には少々恐る、の赴任でしたが、北海道の自然と同様おおらかで自由な雰囲気の中で過ごせました。私は土壌物理学が専門で、赴任後もこれまで同様に土の科学研究に取り組んで来ました。北海道大学は、実学の重視を看板にしていますが、農学においても基礎科学の伝統もあり、農学研究院・工学研究院・文学研究院などの同僚と交流しながら、学問の多様性と奥深さのある環境での活動が出来ました。最後の6年間は、隣接する学内の水田圃場で多くの学生諸君と調査する機会が多く、夏も冷涼で快適な絶好の研究生活を送りました。北海道の試験研究機関の仲間、農家、自然栽培の人々と交流できたことも貴重な思い出です。広大で豊かな農地と自然に囲まれた北海道で、学生諸君や同僚と研究教育活動を続けられて、幸せな日々でした。皆さんに感謝しつつ、今後のご活躍ご発展を祈ります。

略　歴

生　年　月　日　昭和32年4月17日
昭和55年 3月　京都大学農学部農業工学科卒業
昭和57年 3月　京都大学大学院農学研究科修士課程農業工学専攻修了
昭和57年 4月　農林土木試験場水利部
昭和59年10月　農業土木試験場農地整備部
昭和63年10月　農業工学研究所農地整備部
平成 3年 4月　農業工学研究所農地整備部主任研究官
平成 4年11月　博士（農学）（京都大学）
平成 9年 4月　岡山大学環境理工学部助教授
平成17年 4月　岡山大学大学院環境学研究科助教授
平成20年 4月　岡山大学環境管理センター准教授
平成21年 5月　岡山大学環境管理センター教授
平成22年 4月　岡山大学大学院環境学研究科教授
平成23年 4月　北海道大学大学院農学研究院教授

農学研究院教授

近藤（こんどう）　則夫（のりお）　氏

大学卒業後40年もの長きにわたり、アズキに病気を引き起こす土壌伝染性の糸状菌・卵菌類の研究に関わることになろうとは想像もしませんでした。試験研究に専念していた農業試験場から大学に戻った32年前、研究と教育のバランスをどうとるか、その前に果たして自分にその能力があるのかどうか日々悩んでいましたが、先輩、同僚に助けられ、また優秀な学生が集ってくれたおかげで苦境を乗り越えられたと思います。ただ、一つのテーマに専念できたことは研究者冥利に尽き充足感はあるのですが、反面別の展開、取り組むべき新たな領域があったのではないかと、この期に及んでジタバタしているのはお恥ずかしい限りです。

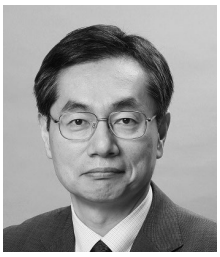
圃場研究のため、北方生物圏フィールド科学センターが管轄する農場の一部区画を長年借用させてもらい利用しています。ここで草取りなど農作業に集中していると諸々の邪念が払われていく気がします。夕刻、たまにヤブ蚊が出るのは困りものですが、広大な農場と手稲の山並みを眺めていると心が落ち着き、石山通の喧騒も気になりません。この贅沢なキャンパス環境の存続を切に願います。最後に、これまでお世話になった方々に深く感謝申し上げます。

略　歴

生　年　月　日　昭和33年2月12日
昭和55年 3月　北海道大学農学部農業生物学科卒業
昭和58年 3月　北海道大学大学院農学研究科農業生物学専攻修士課程修了
昭和58年 4月　北海道立中央農業試験場研究職員
平成 3年 4月　北海道大学農学部助手
平成 7年 3月　博士（農学）（北海道大学）
平成 9年 4月　北海道大学農学部助教授
平成11年 4月　北海道大学大学院農学研究科助教授
平成18年 4月　北海道大学大学院農学研究院助教授
平成19年 4月　北海道大学大学院農学研究院准教授
平成19年 8月　北海道大学大学院農学研究院教授
平成27年 4月　北海道大学北方生物圏フィールド科学センター教授
令和 4年 4月　北海道大学大学院農学研究院教授

先端生命科学研究院教授

綾部（あやべ）　時芳（ときよし）　氏



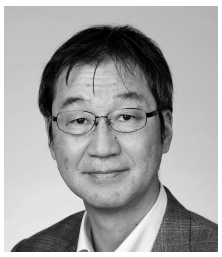
2006年4月に新しい研究室を自然免疫研究室と名付けて、粘膜免疫における腸上皮細胞と自然免疫のエフェクターであるαディフェンシンのはたらきを主なテーマとしてきました。この間、理学部生物学科高分子機能学及び生命科学院生命科学専攻生命融合科学コースの有為な学生、少数ながらも精鋭揃いの教員、ポスドク、事務・技術補佐員、さらには先端生命科学研究院の仲間に恵まれて、自然免疫研究室で腸管自然免疫と宿主による腸内細菌叢の制御機構を理解すべく教育・研究を進めました。思い返せば、Center of Innovation「食と健康の達人」をはじめとした研究室での知の創生と社会実装において、学内はもちろん他大学や企業の研究者と一つ屋根の下で炎症性腸疾患や生活習慣病などの患者に研究成果を届けるべく歩みました。何もなかった研究室開設時に、苦労の末に得られる成果はさぞ格別だろうと信じ夢見ていたことのどれほどが実現したのかを考えた時、辛口にならざるを得ない自分がいます。しかし、例えば、私の理念に共鳴して一緒に力強く歩んでくれたその時々の大学院生や研究者が大きく成長した今の姿を見る時、成したことはあったと実感できます。ありがとうございました。北大の今後にますます期待しています！

略　歴

昭和59年 3月　旭川医科大学医学部卒業
平成元年 3月　旭川医科大学大学院医学研究科博士課程修了
平成元年 3月　医学博士（旭川医科大学）
平成 9年11月　旭川医科大学医学部附属病院助手
平成13年 4月　旭川医科大学医学部助手
平成16年10月　旭川医科大学医学部附属病院講師
平成18年 4月　北海道大学大学院先端生命科学研究院教授

教育学研究教授

松本（まつもと）　伊智朗（いちろう）　氏



1979年の入学以来、学生、大学院生として8年、教員として13年、あわせて21年間北大にいました。指導して下さった諸先生をはじめ、事務職員の方々、同僚の諸先生、学生・大学院生、そしてともに学生時代を過ごした友人たち、数えきれないぐらい多くの方々にお世話になり、支えられてきました。改めて考えると、私の人格と精神の形成は、多くを北大に負っています。生協にもお世話になりました。21年間生協食堂に通い、私の身体の何割かは生協の食事でできていることになります。皆さん、ありがとうございました。

日本の大学は、ゆとりをなくしつつあります。辻褄合わせの書類書きに疲弊し、休日になんとかまとまった研究時間を確保するようなことは、大学教員の日常風景になりました。事務職員さんの多忙化も極まっています。非正規の教職員も増えました。北大では5年雇止めが維持され、これは社会に範を示すべき最高学府として恥ずべきことだと感じています。一方、博士課程院生への経済的支援の充実など、明るい変化もあります。北大のウリであるSDGsの核心は、人にやさしい、人権を守る社会こそ持続的であるということだと思います。愛する北大が、より人にやさしい大学になっていくよう、心から願っています。

略　歴

生　年　月　日　昭和34年7月25日
昭和59年 3月　北海道大学教育学部卒業
昭和61年 3月　北海道大学大学院教育学研究科修士課程修了
昭和61年 3月　教育学修士（北海道大学）
昭和62年 3月　北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程退学
昭和62年 4月 ┐
平成 3年 3月 ┘帯広大谷短期大学社会福祉科講師
平成 3年 4月 ┐
平成 7年 3月 ┘札幌学院大学人文学部講師
平成 7年 4月 ┐
平成15年 3月 ┘札幌学院大学人文学部助教授
平成15年 4月 ┐
平成22年 3月 ┘札幌学院大学人文学部教授
平成22年 4月　北海道大学大学院教育学研究院教授
平成30年 4月 ┐北海道大学大学院教育学研究院
令和 5年 3月 ┘附属子ども発達臨床研究センター長

教育学研究院教授

宮崎（みやざき）　隆志（たかし）　氏

18歳で北海道大学の門をくぐって以来、47年間を本学で過ごして参りました。「人となしし我庭」（『永遠の幸』）を実感し、長きにわたりご教示頂いた皆様に感謝申し上げます。

教育学の中でも周辺的な領域である地域社会教育学にかかわる研究を続けてきましたが、地域を吹き飛ばすようなグローバリゼーションと新自由主義の時代に突入しても、暮らしの基盤を自分たちで守り再創造しようとする住民の主体性に常に励まされていました。

その過程は同時に、苦悩に対峙し挑み続ける住民に関わる資格や責任を研究者としての自身に問う過程でもありました。研究に重きを置く大学であるにもかかわらず、大学における研究や教育が、地域に生きる人々にとって持つ意味を問うことができたのは、ひとえに北海道大学の学風の故と考えます。

人類史的な危機の時代であるからこそ、「人類の永遠の平和と福利に貢献すること」（『通則』）を使命とする北海道大学が、窮境の下にあっても打ちひしがれることなく自由で平和な未来を模索するすべての人々にとって、共に希望を語ることができる存在としてますます発展することを祈念致します。

略　歴

生　年　月　日	昭和33年2月28日
昭和55年　3月	北海道大学水産学部卒業
昭和57年　3月	北海道大学教育学部卒業
昭和59年　3月	北海道大学大学院教育学研究科修士課程修了
昭和61年　3月	北海道大学大学院教育学研究科博士課程中退
平成14年12月	博士（教育学）（北海道大学）
昭和61年　4月	北海道大学教育学部助手
平成　6年　4月	北海道大学教育学部助教授
平成12年　4月	北海道大学大学院教育学研究科助教授
平成17年10月	北海道大学大学院教育学研究科教授
平成19年　4月	北海道大学大学院教育学研究院教授
平成26年　4月 平成30年　3月	北海道大学大学院教育学研究院副研究院長
平成26年　4月 平成30年　3月	北海道大学教育研究評議会評議員
平成27年　4月 平成30年　3月	北海道大学大学院教育学研究院 附属子ども発達臨床研究センター長
平成30年　4月 令和　4年　3月	北海道大学大学院教育学研究院長・大学院教育学院長・教育学部長

メディア・コミュニケーション研究院教授

鈴木（すずき）　純一（じゅんいち）　氏

北大に赴任したのは1994年の春です。約3年のドイツ留学から帰国したばかりで、浦島太郎的な戸惑いもあったのですが、すぐに溶け込めた記憶があります。風土のことをいえば、もともと札幌育ちでしたので、馴染みがあり、広大でゆったりとした時空の感覚は、仕事に少々時間がかかる自分の性格にあっていたのではないかと思っています。しかし何よりも、北大の醸し出す豊かで開かれた研究と教育の自由共同体の雰囲気が大変心強かった。

それから今年で29年、月並みですが本当に早かったなという印象です。ご多聞にもれず山あり谷ありで多々悪戦苦闘もしました。周囲の方々に助けられたのはもちろんですが、構内の季節の移り行きもいろいろな意味で支えになっていたような気がします。ふと眺めた研究室からの光景－初夏の緑にせよ、秋の光にせよ、あるいは凍てつく雪にせよ、しばしの静寂ののち、またやり始めようか、という気持ちになったものです。久しぶりに今日は雪解けが少しばかり進んでいるようです。あとしばらく、特任の教員としてお世話になることになりましたが、このような気持ちをもたらしてくれる北大に心から感謝しております。

略　歴

生　年　月　日	昭和34年10月7日
平成元年　4月	東京大学大学院人文科学研究科独語独文学専攻博士課程退学
平成元年　4月	東京大学文学部助手
平成　6年　4月	北海道大学言語文化部助教授
平成19年　4月	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授
平成22年　4月	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授
平成27年　4月 平成29年　3月	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院副研究院長

メディア・コミュニケーション研究院
教授

河合（かわい）　靖（やすし）　氏

私は、経歴を見ての通り、高校教員から転身した英語の語学教師です。留学して第二言語習得学習者要因研究で学位を取得。北海道大学では、全学教育で英語、教職科目で教科教育法を担当し、大学院でも言語習得論講座で大学語学教員の人材育成をしてきました。また、大学英語教育学会で理事、北海道支部長を務め、一見、英語教育一筋のように見えます。ですが、自分がこの道に向いているかどうかには、ずっと自信を持てずにいました。

大学も北大で、入学して、英語話者への憧れだけでESSに入りました。通常3年で引退のところ、スピーチの鳩山杯で3番を取ったのが最高で、1番を取る夢を諦めきれず、4年の春に大阪で開催のホノルル杯に出場しました。前泊で主催者が相部屋に指定した法政大学の1年生はAFSでアメリカに留学した優秀な学生で、初見で他人のスピーチ原稿を、アメリカ標準英語、ニューイングランド英語、南部英語の3種類の音声的特徴で読み分けて見せました。彼は1位。私は、4年間で最高の出来だと思ったのですが番外でした。

上には上がいると思い知り、就職活動で別の道を探るのですが、一度乗ったレールからは不思議と逃れられません。依頼、ずっと英語の先生として生きて来ました。よくよく考えて見れば、自分には他に何ができるわけでもありません。けっきょく、これが私に天が与えたものだったのかもしれません。

略　歴

生　年　月　日	昭和34年10月12日
昭和59年　3月	北海道大学文学部文学科英語英米文学専攻課程卒業
昭和59年　4月	北海道帯広柏葉高等学校教諭
昭和63年　4月	北海道遠軽高等学校教諭
平成元年　8月	アラバマ大学大学院College of Education修士課程入学
平成　3年　8月	アラバマ大学大学院College of Education修士課程修了
平成　3年　8月	アラバマ大学大学院College of Education博士課程入学
平成　7年　4月	北海道大学言語文化部講師
平成　7年12月	アラバマ大学大学院College of Education博士課程修了
平成　8年　5月	北海道大学言語文化部助教授
平成19年　4月	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授
平成21年　4月	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授
令和元年　4月	北海道大学外国語教育センター長
令和　3年　4月	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院長 国際広報メディア・観光学院長

メディア・コミュニケーション研究院
教授

鈴木（すずき）　志（し）のぶ　氏

北海道大学に着任したのは25年前のことです。20代から30代の人生に起きた紆余曲折の結果、縁あって北大に採用していただきました。言語文化部の英語教育系教員として着任しましたが、その後メディア・コミュニケーション研究院の所属になり、大学院の創設に伴い、大学院教育にも関われるようになりました。北大では、高い資質に恵まれた多くの学生に教えるというやりがいのある仕事を与えられ、自分自身も成長することができたと感じています。研究に関しては、私の専門分野であるコミュニケーション研究でいくつかの重要なテーマにじっくり取り組み、成果を出す環境を与えられたことに、大変感謝しております。教育・研究以外の大学・部局運営の仕事にも取り組み、困難なこともありましたが、多くの優れた同僚の皆さんと、有能かつ迅速、丁寧な事務部の皆様のお陰で、時に楽しく、大過なく務めることができました。幸福な教員生活を送れたことを、お世話になった皆様に心より感謝申し上げたいと思います。最後になりましたが、北大の今後の益々の発展を祈念しております。

略　歴

生　年　月　日	昭和35年1月3日
昭和57年　3月	藤女子大学英文学科卒業
昭和57年　8月 昭和60年　2月	JOYインターナショナル（英語教育及び翻訳）
昭和60年　6月 昭和63年　8月	ECインターナショナル（産業・技術翻訳）
平成　2年　5月	エマソン大学大学院修士課程コミュニケーション専攻修了
平成　6年　6月	ミネソタ大学大学院博士課程コミュニケーション学科修了
平成　6年　6月	Ph. D（文学博士）（ミネソタ大学）
平成　7年　4月 平成10年　3月	北海道東海大学教育開発研究センター専任講師
平成10年　4月	北海道大学言語文化部助教授
平成19年　4月	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授
平成26年　4月	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授

工学研究院教授

折原（おりはら）　宏（ひろし）　氏

2004年3月に24年間暮らした名古屋から札幌に赴任しました。途中、新千歳空港から札幌までの車窓に広がる一面の銀世界に心躍りました。名古屋での夏は地球温暖化の影響もあり、耐え難いものになっていたので、以来札幌がすっかり気に入っています。自宅近くの豊平川で夏はジョギング、冬はスノーシューでの散歩を楽しんでいます。

ちょうど私が着任した年に国立大学は法人化されたので、大学の環境が大きく変わるのではないかと心配でしたが、北大の包容力のおかげか、今日までなんとか教育と研究にそれなりの時間を費やすことができました。私の専門はソフトマター物理学という比較的新しい学問分野ですが、その発展にこの札幌の地から多少なりとも貢献できたことを嬉しく思います。幸い、人にも研究費にも恵まれて、一応満足できる仕事ができたと思っています。とはいえ、まだまだやりたいことがあるので、これからも札幌で研究を続ける予定です。最後になりますが、快適な環境で幸せな大学生活を送れましたこと、お世話になりました多くの皆様に感謝申し上げます。

略　歴

生　年　月　日	昭和33年 3月10日
昭和55年 3月	静岡大学理学部卒業
昭和57年 3月	名古屋大学大学院工学研究科博士課程前期課程修了
昭和60年 3月	名古屋大学大学院工学研究科博士課程後期課程修了
昭和60年 3月	工学博士（名古屋大学）
昭和60年 4月	名古屋大学工学部附属人工結晶研究施設助手
平成 1年 4月	名古屋大学工学部附属人工結晶研究施設講師
平成 2年12月	名古屋大学工学部附属人工結晶研究施設助教授
平成 7年 4月	名古屋大学工学部助教授
平成 9年 4月	名古屋大学大学院工学研究科助教授
平成14年 4月	名古屋大学理工科学総合研究センター助教授
平成16年 4月	北海道大学大学院工学研究科教授
平成22年 4月	北海道大学大学院工学研究院教授

工学研究院教授

清水（しみず）　康行（やすゆき）　氏

この度北海道大学大学院工学研究院を定年退職することになりました。平成6年からの北海道大学勤務、及びそれまでの北海道開発局勤務を通じて大変多くの皆様にお世話になり大変ありがとうございました。その間、わたくしの至らぬ所も多々あり多くの皆様にご迷惑をおかけしたこともあったと存じます。この場を変えてお詫びさせて頂きます。

今後は体が動く限りはスポーツなどの趣味と並行して、もう少しの間は、また別の立場から教育、研究の場を通じて少しでも世の中の役に立てればと思っております。また各方面でご迷惑をおかけすることもあろうかと存じますが何卒よろしくお願いします。

略　歴

生　年　月　日	昭和32年8月13日
昭和55年 3月	北海道大学工学部卒業
昭和55年 4月	北海道開発庁総務課
昭和55年 4月	北海道開発局旭川開発建設部
昭和58年 3月	北海道開発局旭川開発建設部治水課河川計画係長
昭和60年 4月	北海道開発局土木試験所第1研究部河川研究室主任研究員
昭和63年 4月	北海道開発局開発土木研究所水工部河川研究室主任研究員
平成 2年 6月	北海道開発局開発土木研究所水工部河川研究室副室長
平成 2年12月	工学博士（北海道大学）
平成 4年 4月	北海道開発局水工部河川研究室長
平成 6年 4月	北海道大学工学部助教授
平成 9年 4月	北海道大学大学院工学研究科助教授
平成17年 4月	北海道大学大学院工学研究科教授
平成21年 4月	北海道大学大学院公共政策学連携研究部教授
平成23年 4月	北海道大学大学院工学研究院教授

工学研究院教授

松井（まつい）　佳彦（よしひこ）　氏

工学部の助手として採用され、研究と教育が仕事としての職種についてから39年が経過し、定年退職という大きな区切りを迎えることになりました。その間、平成7年に研究室を主宰するPIになってからは約200名の学生を送り出すことができました。研究室の助手の時代、さらには講義や演習を通じては、より多くの学生に接してきたことになります。彼らの人生に何らかの影響を与えてきたことになりますが、それが彼らのいささかのプラスになっていればと思っています。研究においても研究費を頂き、自由に興味のあることを研究させてもらえました。何かを残すことはできたのかは分かりませんが、充実した時間を過ごすことができました。またその間、学内や国内外の学会、協会などの仕事を通じて様々なすばらしい人たちと接する機会にも恵まれました。北海道大学から岐阜大学に異動し、また北海道大学に戻ってincrementalではありますが高みを目指した年月でした。その間、たくさんの人たちにお世話になり支えられてきたことに感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

略　歴

生　年　月　日　昭和32年12月21日
昭和55年 3月　北海道大学工学部卒業
昭和57年 3月　北海道大学大学院工研究科修士課程修了
昭和59年 3月　北海道大学大学院工研究科博士課程退学
昭和59年 4月　北海道大学工学部助手
平成 4年 9月　博士（工学）（北海道大学）
平成 7年 4月　岐阜大学工学部助教授
平成10年10月　岐阜大学工学部教授
平成17年 5月　北海道大学大学院工学研究科教授
平成22年 4月　北海道大学大学院工学研究院教授

工学研究院教授

蟹江（かにえ）　俊仁（しゅんじ）　氏

2000年9月に北海道大学に赴任して以来、およそ23年にわたり北海道大学で教育と研究に携わらせていただきました。寒冷環境下における構造物に関する研究を始めたのは、北海道大学大学院で手掛けた「積雪凹凸路面による走行車両振動が橋梁にもたらす動力学的負荷」に関する研究でした。ちょうどその頃、二度にわたるオイルショックの影響もあり、原油価格は1バレル30ドルを超えようかという時代。地球上のどこで石油掘削を行っても収益がとれると言われ、民間企業就職後に携わった北極海沖に設置する石油掘削プラットフォームの開発は、「寒地環境工学」というその後の研究生活の方向性を決めたといっても過言ではありません。

時を経て、極寒冷地の環境が地球温暖化とともに変化しつつある今、そこにある人々の暮らしとそれを支える様々な社会基盤構造物の安全性や安定性が注目されるようになりました。これまでの知見を踏まえ、私にまだ貢献できることはあるのか、微力ながら引き続き考えていきたいと思っております。

最後になりますが、これまでご指導・ご鞭撻を賜った多くの皆様に深く感謝申し上げるとともに、北海道大学の益々の発展を祈念しております。

略　歴

生　年　月　日　昭和32年9月22日
昭和55年 3月　北海道大学工学部卒業
昭和57年 3月　北海道大学大学院工学研究科修士課程修了
昭和57年 4月 ┐
平成12年 8月 ┘ 民間（大成建設株式会社）
平成 2年 9月　アメリカ・スタンフォード大学大学院工学研究科修士課程修了
平成 9年 6月　博士（工学）（北海道大学）
平成12年 9月　北海道大学大学院工学研究科助教授
平成19年 3月　北海道大学大学院工学研究科教授
平成19年 4月　北海道大学大学院公共政策学連携研究部教授
平成21年 4月　北海道大学大学院工学研究科教授
平成22年 4月　北海道大学大学院工学研究院教授

医学研究院教授

渡邉（わたなべ）　雅彦（まさひこ）　氏

1992年、生後1ヶ月の乳児を含む家族5人で厳冬の北海道に足を踏み入れ、環境も人間関係も全くの白紙状態で新たな生活を始めた。その頃は、分子生物学の発展による遺伝子クローニングが絶頂の時期であり、遺伝子改変技術の登場による個体レベルでの遺伝子機能解明へと、生命科学研究がパラダイムシフトする転換期でもあった。そのような時代的背景にあることを当時は意識する余裕もなく、ただグルタミン酸神経伝達の解剖学的研究の立ち上げを目指した。そのような立ち上げの時期に、意欲ある大学院生や学部学生が集まり自然発生的に研究チームができ、国内外の優れた研究者との共同研究も活発になり、それが現在まで続く研究と研究室の基盤になった。

定年を迎えこれまでを振り返ると、人も事物も良い方向に展開するときには、天の時、地の利、人の和の3つの要素が驚くほど揃っていて、まるでそうなるように仕組まれていたのではないかとさえ思う。北海道大学に赴任して31年余りが過ぎ、あの時連れてきた子どもたちが当時の私の年齢を越したことを思うと、時間の過ぎゆく速さと世代の歯車が回ったことを自覚する。

略　歴

生　年　月　日	昭和34年4月2日
昭和59年　3月	東北大学医学部卒業
昭和63年　3月	筑波大学大学院医学研究科博士課程修了
昭和63年　3月	医学博士（筑波大学）
昭和63年　4月	金沢大学医学部助手
平成　2年　1月	東北大学医学部助手
平成　4年　2月	北海道大学医学部助教授
平成10年11月	北海道大学大学院医学研究科教授
平成29年　4月	北海道大学大学院医学研究院教授
平成28年　4月 令和　4年　3月	北海道大学脳科学研究教育センター・センター長

歯学研究院教授

菅谷（すがや）　勉（つとむ）　氏

広大な北海道の自然に魅了されて北海道大学に入学し、気が付けば44年が過ぎ去りました。私が専門としてきた歯周病学、歯内療法学というのは、歯を抜かずに治すことが使命です。学生の頃は診断も治療も難しそうには見えず、歯科医療を簡単に考えていましたが、歯周病には少し疑問を感じていました。ここを少し掘り下げようと足を踏み入れてみたところ、数年ですべての疑問は解消されると想像していたのに、謎は深まるばかりでした。謎を解くのに必要な情報がこの世になければ自分で作るしかありません。基礎研究を重ね、それを活かせて歯周病が改善するのを体験したときには、えも言われぬ達成感があったものです。そこでまた、別の壁を破壊したくなるのはロールプレイングゲームと同じでした。ただ、ゴールは自分で決めなければいけないので、目標を高く設定すると終わりは永遠に訪れません。歯があること、噛めることが健康寿命に大きく影響することからも、歯を何とか抜かずに治したいという患者は増えているように思いますので、今後さらに進歩発展が求められるでしょう。これまでに自分が得た情報を次世代に残すことで、誰かがこれを役立てて一歩でも先に進んでくれることを願います。

略　歴

生　年　月　日	昭和35年1月30日
昭和60年　3月	北海道大学歯学部卒業
平成　4年　9月	博士（歯学）（北海道大学）
昭和63年10月	北海道大学歯学部附属病院助手
平成　2年　8月	北海道大学歯学部助手
平成10年　7月	北海道大学歯学部附属病院講師
平成14年　1月	北海道大学大学院歯学研究科講師
平成14年　5月	北海道大学大学院歯学研究科助教授
平成19年　4月	北海道大学大学院歯学研究科准教授
平成29年　4月	北海道大学大学院歯学研究院准教授
令和元年11月	北海道大学大学院歯学研究院教授

歯学研究院教授

佐野（さの）　英彦（ひでひこ）　氏

1997年の赴任以来、北海道大学で25年以上お世話になりました。私の専門とする分野は歯科保存学で、歯科の教育・研究・臨床の土台を担っています。当分野では、「歯を残す」が目標。患者さんのQOLを高めることに寄与しています。

在職中は、海外からの特任教授や新進気鋭の研究者と多数の共同研究を行い、外国人留学生も多数引き受けました。また、Hokkaido Summer Instituteでは国内外の著名な研究者からのご協力をいただきました。このようなことから、日本発の接着歯学（接着材を用いた歯に優しい治療法）を世界に広め、新たな歯科診療の基幹を成すde facto standardを北大から世界に発信することができたと信じています。この成果は世界で数十億人レベルの患者さんに用いられることになると思います。

2012年から、伝統ある北大全学漕艇部の部長（顧問）を務めさせていただきました。この間、部員数の減少やコロナ禍など、部の存続を心配した時期もありました。しかし、OBや現役部員の努力、加えて大学からのサポートもあり、昨年あたりから漕艇部復活の兆しが見えてきています。元総長で部長を務められた堀内寿郎先生以来である「エイトでの全日本選手権優勝」は果たせぬ夢でしたが、今後の漕艇部の活躍を強く期待しています。

最後に、今までお世話になった北海道大学及び皆様に深く感謝申しあげます。

略　歴

生　年　月　日　昭和32年9月19日
昭和58年 3月　東京医科歯科大学歯学部卒業
昭和62年 3月　東京医科歯科大学大学院歯学研究科修了
昭和62年 3月　歯学博士（東京医科歯科大学）
昭和63年 4月　東京医科歯科大学歯学部助手
平成 7年11月　東京医科歯科大学歯学部講師
平成 9年11月　北海道大学歯学部教授
平成12年 4月　北海道大学大学院歯学研究科教授
平成29年 4月　北海道大学大学院歯学研究院教授

歯学研究院教授

井上（いのうえ）　哲（さとし）　氏

昭和51年3月、受験のため京都から初めて札幌を訪れ、受験前日に下見のため北大構内を歩いてから早47年経ちました。合格発表後、下宿探しに再度札幌へ来た際、千歳空港で私服警察官に呼び止められ、当時新聞を賑わした北海道庁爆破事件の犯人と間違えられたことが、ついこの前の事のように思い出されます。学生時代は歯学部スキー部へ入部し、良き先輩・良き後輩に恵まれ、朝まで飲み明かしたことも数知れずありました。

歯学部卒業後も北大への通学通勤生活はずっと継続し、まずは「歯科のベーシック」と私が勝手に考えている保存修復学教室に入局して大学院生・助手となり、その後は卒前臨床実習・卒直後臨床研修をマネージする口腔総合治療部講師を経て、新設された臨床教育部担当教授に就任しました。これまで北大歯学部の卒業生らしいフロンティア精神に溢れた歯科医師となってくれるように臨床教育をしてきたつもりですが・・・。

長きに亘り私を育ててくれたエルムの園、歯学部関係者、病院関係者の皆様に心から感謝するとともに、北大が今後200年、300年と発展し続けて行くことを切に願います。

略　歴

生　年　月　日　昭和32年7月3日
昭和57年 3月　北海道大学歯学部卒業
昭和61年 3月　北海道大学大学院歯学研究科博士課程修了
昭和61年 3月　歯学博士（北海道大学）
昭和61年 4月　北海道大学歯学部助手
平成12年 4月　北海道大学大学院歯学研究科助手
平成14年 5月　北海道大学歯学部附属病院講師
平成15年10月　北海道大学医学部・歯学部附属病院講師
平成16年 4月　北海道大学病院講師
平成25年 5月　北海道大学大学院歯学研究科教授
平成29年 4月　北海道大学大学院歯学研究院教授

文学研究院教授

小杉（こすぎ）　康（やすし）　氏

1997年から北大に教員として勤めております。その間に所属部局は文学部から文学研究科に、さらに文学研究院へと改組、また名称も変更しました。前身組織であった北方文化研究施設から大講座制の名のもとに北方文化論講座として文学部に加わり、その後の改組を経て名実ともに考古学を専門とする考古学研究室へと変わりました。考古学の研究・教育を担当しながら、同時に学内の埋蔵文化財調査センターにも長らく関わってまいりました。札幌キャンパスは全域が遺跡台帳に埋蔵文化財包蔵地として登載されています。よって地下に関わる全ての工事の際には事前の調査が必要です。センター員、施設部の皆様の努力・協力のもとに、埋文関係では監督官庁となる道教委、市教委との調整を重ねながら、工事の着工日までに本発掘調査の必要の有無を確認し、本発掘にならない限りは予定通りに工事を実施できる体制を整えることができたと自負しております。

専門の縄文文化の研究ではいくつかの発見もありましたが、その分新たなより深い問題へと逢着し、未だ納得のいく到達点には辿り着いていません。北大諸先輩、考古学の諸先達の学恩に感謝し、後生に畏れながらも人類史研究の希望を託します。

略　歴

生　年　月　日　昭和34年12月6日
昭和58年 3月　明治大学文学部史学地理学科卒業
昭和61年 3月　明治大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程修了
平成 2年 3月　明治大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程単位修得退学
平成元年 4月 ┐
平成 2年 3月 ┘日本学術振興会特別研究員DC
平成 2年 4月 ┐
平成 3年 3月 ┘日本学術振興会特別研究員PD
平成 3年 4月 ┐
平成 7年 3月 ┘明治大学文学部専任助手
平成 8年 4月 ┐
平成 9年 3月 ┘国立民族学博物館共同研究員
平成 9年 4月　北海道大学文学部助教授
平成20年 4月　北海道大学大学院文学研究科教授
平成27年 4月 ┐
令和 5年 3月 ┘北海道大学埋蔵文化財調査センター長
平成31年 4月　北海道大学大学院文学研究院教授

文学研究院教授

佐々木（ささき）　啓（けい）　氏

私は、本学文学部を卒業、同大学院文学研究科修士課程修了後、博士後期課程を2ヶ月で退学し、本学の助手として採用されました。当時、私は26歳で、昨今の就職状況を考えると、誠に幸運な研究者人生の滑り出しでした。助手を6年余り勤めたのち、一度北大を離れ、2002年に母校の文学研究科に助教授として戻ってきました。多くの恩師、畏友の助けにより、外れかけていた学究の道で再起できました。爾来（じらい）21年半、本学の恵まれた環境のもと、研究者、教育者として充実した職業人生を送ることができましたが、達成できた業績の少なさには忸怩たる思いがあります。しかし、若き日に取り組み始めた大きな問いに対して、朧げとはいえ、自分なりにその答えを見出したと考えています。幸いにも、私の研究には広い研究室や高額な実験機器なども必要ではありません。科学技術の進歩により、今や図書館はネット上にすら存在しています。退職後も本学勤務時代に到達できた研究成果を少しでも世に出そう、と心密かに期しています。

定年退職にいたる今日までお世話になった本学の教職員、同僚の皆様に心より感謝申し上げるとともに、北海道大学のますますの発展を祈念しております。

略　歴

生　年　月　日　昭和34年4月19日
昭和58年 3月　北海道大学文学部哲学科（西洋哲学専攻課程）卒業
昭和60年 3月　北海道大学大学院文学研究科修士課程（哲学専攻）修了
昭和60年 5月　北海道大学大学院文学研究科博士後期課程哲学専攻中退
昭和60年 6月　北海道大学文学部助手
平成 3年 5月　弘前学院大学文学部講師
平成 5年10月　弘前学院大学文学部助教授
平成14年 8月　北海道大学大学院文学研究科助教授
平成19年 4月　北海道大学大学院文学研究科准教授
平成22年 4月　北海道大学大学院文学研究科教授
平成31年 4月　北海道大学大学院文学研究院教授

文学研究院教授

佐々木（ささき） 亨（とおる） 氏

大学教員が私にとって四つめの職業でしたが、いちばん長く、いちばん充実した時間をいただきました。北大とみなさま方に、心から感謝申し上げます。

三つめの職業でした博物館学芸員当時、私の職場は網走にありました。札幌在住の学芸員の仲間たちが、文学部で開講している学芸員養成課程の科目を非常勤講師として教えているのを、羨ましく思っていました。そして、自分もいまの職場経験を活かして、非常勤として教壇に立ってみたいと真剣に考えるようになり、たしか平成3年ぐらいにこの課程を担当する先生に自分を売り込む手紙を書きました。結果は、札幌までの旅費を出せないので難しいとのお返事でしたが、10年後に自分が文学部教員になり、その念願が叶いました。こういう巡り合わせもあるのだと驚いたことを、いまでも鮮明に覚えています。

それ以来、この課程の講義や実習だけでなく、博物館学の研究やミュージアム関係のプロジェクトに係わることができました。これまで文学部になかった「博物館学研究室」も平成31年4月に誕生しました。退職後もこれまで頂いた経験を活かして、世のため、人のため、ミュージアムのために係わっていきたいと思います。刻石流水！

略　歴

生　年　月　日	昭和34年9月8日
昭和58年 3月	北海道大学文学部行動科学学科（総合行動学専攻課程）卒業
昭和62年 3月	北海道大学大学院文学研究科修士課程（行動科学専攻）修了
昭和58年 4月 昭和58年12月	株式会社札幌ツーリスト
昭和62年 4月 平成元年 3月	社団法人北海道開発問題研究調査会（HIT）研究員
平成元年 4月 平成 8年12月	北海道教育庁生涯学習部社会教育課学芸員 （北海道立北方民族博物館）
平成 9年 1月	東北大学東北アジア研究センター助教授
平成12年 4月	北海道大学大学院文学研究科助教授
平成20年 4月	北海道大学大学院文学研究科教授
平成31年 4月	北海道大学大学院文学研究院教授

文学研究院教授

冨田（とみた） 康之（やすゆき） 氏

平成7年に北大に着任し、28年が過ぎました。着任当初は時間の流れが緩やかに感じられ、北海道の、のびやかな自然と共に落ち着いた環境の中で研究・教育に取り組むことが出来ました。その後、齢を重ねるうちに時の流れが少しずつ早くなり、心持ちもせわしなくなっていったように思います。そんなある時、キャンパス内で絵を描いている方に目が止まりました。通り過ぎる折にその絵が目に入ってきましたが、切り取られたキャンパスの風景がとても美しいことに驚きました。何だか少し気分が明るくなったような気がしました。

その日の昼休みにカメラをもって研究室を出ると、学内の美しい風景が自然と目に飛び込んでくるような感覚がありました。そうして何枚もシャッターを切りました。その経験があって以降、キャンパス内の散歩がとても楽しくなっていきました。「こんなに素敵な職場にいたんだ！」と改めて感じると、日々の忙しさは何だか自分で自分を追い込んでいただけなのかもしれない、そんな風に思えるようにもなりました。そして時の流れを少しだけ緩やかにしてくれる習慣となりました。些細なことではありますが、北大が私を成長させてくれた懐かしい思い出の一つでした。

略　歴

生　年　月　日	昭和33年2月6日
昭和55年 3月	愛知県立大学文学部国文学科卒業
昭和58年 3月	名古屋大学大学院文学研究科国文学専攻博士前期課程修了
昭和62年 3月	名古屋大学大学院文学研究科国文学専攻博士後期課程単位取得退学
昭和63年 4月	名古屋女子大学文学部専任講師
平成 4年10月	名古屋女子大学文学部助教授
平成 7年 4月	北海道大学文学部助教授
平成12年 4月	北海道大学大学院文学研究科助教授
平成13年10月	北海道大学大学院文学研究科教授
平成15年12月	博士（文学）（北海道大学）
平成31年 4月	北海道大学大学院文学研究院教授

情報科学研究院教授

小野（おの）　哲雄（てつお）　氏

これまで私の研究、教育に関わってくださったすべてのみなさまに感謝を申し上げます。私は若い頃、さまざまな仕事を経験したのち、32歳で他大学の大学院修士課程に入学したので、研究者としては当時、かなり遅いスタートだったと思います。博士後期課程を修了後、京都府にあるATR（国際電気通信基礎技術研究所）に5年ほど在籍し、人型ロボットと人間との相互作用に関する研究（ヒューマンロボットインタラクション）の黎明期にこの研究に携われたことは幸せでした。

その後、他大学に移り、博士後期課程修了後から7年ほどで教授職に就くことができ、さらに、平成21年から北大で研究、教育に携われたことは大変幸運だったと思います。若い頃からさまざまな経験をしてきたことが、これまでの研究・教育に多少でも活きてきたのかなと思っています。

研究職に就いてからは、あまり「仕事」をしているという意識はなく、自分の興味の赴くままに、自分が面白いと思う研究テーマを楽しく追いかけてきたように思います。それらは主に、ロボット（もしくはエージェント）と人間の相互作用や、環境を賢くすることで人間を支援する環境知能に関するものでした。上で述べたとおり、32歳の遅いスタートながら、さまざまな幸運に恵まれて、楽しい研究生活を送ることができました。スタートが遅かった分、まだまだエネルギーに溢れており、定年後ももう少しさまざまなことにチャレンジしたいと思っています。

略　歴

生　年　月　日　昭和35年1月20日
昭和59年 3月　北海道教育大学教育学部卒業
昭和60年 3月　学校法人桑園学園札幌ソフトウェア専門学校教務課専任講師
平成 6年 3月　北陸先端科学技術大学院大学
　　大学院情報科学研究科博士前期課程修了
平成 9年 6月　北陸先端科学技術大学院大学
　　大学院情報科学研究科博士後期課程修了
平成 9年 6月　博士（情報科学）（北陸先端科学技術大学院大学）
平成 9年 7月　株式会社　エイ・ティ・アール知能映像通信研究所客員研究員
平成13年10月　株式会社　国際電気通信基礎技術研究所客員研究員
平成13年11月　公立はこだて未来大学システム情報科学部助教授
平成17年 4月　公立はこだて未来大学システム情報科学部教授
平成21年10月　北海道大学大学院情報科学研究科教授
平成31年 4月　北海道大学大学院情報科学研究院教授

情報科学研究院教授

金井（かない）　理（さとし）　氏

1980年代当時、精密工学科では計算機による3次元設計・製造支援ソフトウェアの研究が世界に先駆け行われていた。卒業研究では数値制御工作機械用の3次元部品加工ソフトウェア開発の課題を与えられ、計算機内の形を物理空間に実体化できる楽しさを味わった。初めて参加した学会で、新進気鋭の若手がのびのびと発表している雰囲気に魅せられ、また米国企業でのインターンシップも経験させて頂き、博士課程進学と大学教員の道を選択した。教員になって間もなく、他大学で独立して新研究室の立上げを行なうという貴重（無謀？）な体験もした。東京地区の若手研究者の学会活動や資金獲得に対するエネルギッシュさに吃驚する一方で、落ち着いた研究環境としての北大の利点も再認識できた。2010年代に入り、専門であるディジタル幾何処理工学は、従来の設計・製造のみならず、高度な3次元計測技術との融合により、土木・建築、医療、自動運転などの領域でも必要性が益々高まっている。このような素晴らしい分野に出会う機会を与えて頂いた諸先生・先輩方、研究を共にした才能溢れる同輩・後輩の研究者の方々、さらに優秀な学生達に助けられ何とか退職の日を迎えることができた。これらの方々に改めて御礼申し上げたい。

略　歴

生　年　月　日　昭和35年3月11日
昭和57年 3月　北海道大学工学部精密工学科卒業
昭和59年 3月　北海道大学大学院工学研究科精密工学専攻修士課程修了
昭和62年 3月　北海道大学大学院工学研究科精密工学専攻博士課程修了
昭和62年 3月　工学博士（北海道大学）
昭和62年 4月　北海道大学工学部助手
平成元年 4月　東京工業大学工学部助教授
平成 7年 4月　北海道大学工学部助教授
平成 9年 4月　北海道大学大学院工学研究科助教授
平成16年 4月　北海道大学大学院情報科学研究科助教授
平成19年 4月　北海道大学大学院情報科学研究科教授
平成31年 4月　北海道大学大学院情報科学研究院教授

情報科学研究院教授

坂本（さかもと）　雄児（ゆうじ）　氏

昭和54年に入学してから、学生および研究者として長きに渡り北大にお世話になってきました。

その間、目に見えるようにすることに興味を持ち、不可視物体内の画像化（雪中レーダ）やコンピュータグラフィックス、ホログラフィなどを行う他、無線通信や遺伝的アルゴリズムなど、興味の赴くまま様々な研究を行ってきました。今思うと、いずれの研究も黎明期の研究で、社会的には「何の役に立つの？」と思われるものでした。特に、力を入れてきた計算機合成ホログラムは、今でこそ国のプロジェクトに採択されておりますが、研究を始めた頃は世界的にも研究者は少なく、ほとんど相手にされない状況でした。北大は、このような先行きの分からない研究をさせていただける大変にありがたい環境でした。

最近は、成果の上がっている研究に注目が集まる傾向にありますが、若い人たちには、「無理、無謀」と思われるものに手を出して欲しいと思います。それが、多様性（ダイバシティ）であり、数十年先の新たな産業や研究に結びつく、人類の英知の地平を広げるものと信じてください。

最後になりますが、これまで支えてくれた諸先生・同僚・事務・学生諸君に心より御礼申し上げます。

略　歴

生　年　月　日　昭和35年3月13日
昭和58年 3月　北海道大学工学部電気工学科卒業
昭和60年 3月　北海道大学大学院工学研究科情報工学専攻修士課程修了
昭和63年 3月　北海道大学大学院工学研究科電気工学専攻博士後期課程修了
昭和63年 3月　工学博士（北海道大学）
昭和63年 4月　株式会社日立製作所入社　（中央研究所）
平成 2年 8月　北海道大学工学部助手
平成 5年 5月　室蘭工業大学工学部講師
平成 6年 2月　室蘭工業大学工学部助教授
平成 8年 3月 ┐
平成 8年12月 ┘ イリノイ大学（米）工学部汎用工学科　研究員
平成12年 4月　北海道大学大学院工学研究科助教授
平成16年 4月　北海道大学大学院情報科学研究科助教授
平成19年 4月　北海道大学大学院情報科学研究科准教授
平成27年 4月　北海道大学大学院情報科学研究科教授
平成31年 4月　北海道大学大学院情報科学研究院教授

薬学研究院教授

周東（しゅうとう）　智（さとし）　氏

この度、定年退職を迎えることになりました。31年間の在職中、北大内の多くの方々お世話になりました。厚く御礼申し上げます。また、北大の益々の発展を祈念致します。

略　歴

生　年　月　日　昭和32年6月28日
昭和55年 3月　北海道大学薬学部卒業
昭和57年 3月　北海道大学大学院薬学研究科製薬科学専攻修士課程修了
昭和63年 3月　薬学博士（北海道大学）
昭和57年 4月 ┐
平成 3年12月 ┘ 民間（東洋醸造株式会社医薬品研究所）
平成 4年 1月 ┐
平成 4年 3月 ┘ 民間（旭化成工業株式会社合成医薬研究所）
平成 4年 4月　北海道大学薬学部助教授
平成10年 4月　北海道大学大学院薬学研究科助教授
平成17年 4月　北海道大学大学院薬学研究科教授
平成18年 4月　北海道大学大学院薬学研究院教授

電子科学研究所附属グリーンナノテクノロジー研究センター教授

西井（にしい）　準治（じゅんじ）　氏

平成21年7月に産業技術総合研究所から電子科学研究所に赴任しました。研究室がやっと軌道に乗り始めた平成25年の夏、電子科学研究所の所長選挙で選出され、大学のマネージメント体制や予算の仕組み、教員人事、さらには本省から聞こえてくる大学改革への対応など、様々なことを学ばせて頂きました。その後の研究担当理事の任期中には、公的資金や共同研究費の受入額向上や若手研究者の支援などに注力しました。現在の本学の産学連携体制が、他大学に引けを取らないレベルになったことを感慨深く思います。このように在職期間の半分以上を管理業務に費やしましたが、学生と過ごした研究室での時間や一緒に働いた事務職員の方々との絆は、私にとって貴重な財産となりました。お世話になった皆様に心より感謝致します。これからも、日本一美しい北大のキャンパスから元気な学生が社会人として巣立ち続けることを願っております。

略　歴

生　年　月　日	昭和32年8月16日
昭和57年 3月	東京都立大学大学院工学研究科修士課程修了
昭和57年 4月	日本板硝子株式会社
平成 2年 1月	工学博士（東京都立大学）
平成 5年 4月	工業技術院大阪工業技術試験所通商産業技官
平成18年 7月	産業技術総合研究所光技術研究部門主幹研究員
平成21年 7月	北海道大学電子科学研究所教授
平成25年10月	北海道大学電子科学研究所長
平成29年 4月	北海道大学理事・副学長
令和 2年10月	北海道大学電子科学研究所教授

スラブ・ユーラシア研究センター教授

田畑（たばた）　伸一郎（しんいちろう）　氏

1986年、ゴルバチョフのペレストロイカが始まり、世界が注目している時期に、ソ連・東欧研究の中心であるスラブ研究センターに赴任しました。それから37年、人生の半分以上を北海道で過ごしたことになります。同僚や職場の環境に恵まれ、ソ連・ロシアの経済研究にそれなりに貢献できたことを誇りに思います。最近は、ロシアの極東や北極域の研究にも関わるようになり、ロシアと中国やインドを比較する研究に携わることもできました。

また、6年にわたって北大ヘルシンキオフィスの所長を務めさせていただいたことを大変ありがたく思っております。当センターで大学院教育が始まったのは2000年からで、それほど多いわけではありませんが、若い世代の人たちの研究に接することもできました。近年は、専門の知見を活かして、北海道や北大のロシアやロシア人との交流にいくらかでも貢献したいと思うようになりましたが、最後の年に、ウクライナ侵攻というとんでもないことが起ってしまったことは、心底残念でなりません。

私は大変恵まれた研究者人生を送ることができたと思っております。北大とスラブ・ユーラシア研究センターに深く感謝すると同時に、ますますのご発展を祈っております。

略　歴

生　年　月　日	昭和32年4月13日
昭和56年 3月	東京大学教養学部卒業
昭和61年 3月	一橋大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得退学
昭和61年 4月	北海道大学スラブ研究センター助教授
平成 9年 3月	北海道大学スラブ研究センター教授
平成16年 4月 平成18年 3月	北海道大学スラブ研究センター長
平成16年 4月 平成18年 3月	北海道大学教育研究評議会評議員
平成27年 2月 平成29年 1月	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター長
平成27年 2月 平成29年 1月	北海道大学教育研究評議会評議員

情報基盤センター教授

大宮（おおみや）　学（まなぶ）　氏

本学の教員として40年、学生時代を含めると合計46年にわたり北海道大学と共に歩んできました。この間、入試改革、国立大学法人化、年俸制など大きな変革をいくつも経験してきましたが、それら機会を有効に利用しながら現在に至っています。すっかり長居をしてしまいましたが、充実した日々を過ごすことができました。

工学部に在職中は、アンテナや電波伝搬など無線通信技術に関する研究を主として行っていました。大型計算機センター（現在の情報基盤センター）に着任してからは、スーパーコンピュータなどの高性能計算機の利用技術開発ならびにユーザ支援を行ってきました。特に、最先端の研究ツールである高性能計算機とその利用技術を手に入れたことで、無線通信分野の研究に計算科学的手法を導入し、それを研究テーマの一つとして発展させることができました。一方、ユーザ支援では徹底したアウトリーチ活動を行ったことで、課題とその解決策を同時に獲得することができました。その甲斐あって、高性能計算機に対する支持を得るとともに、ユーザ数が急増し、運用コストを利用負担金で賄えるようになりました。このことは、大きな成果であると自負しています。

略　歴

生　年　月　日	昭和32年12月6日
昭和56年 3月	北海道大学工学部卒業
昭和58年 3月	北海道大学大学院工学研究科電子工学専攻修士課程修了
昭和58年 4月	北海道大学工学部助手
平成元年 3月	工学博士（北海道大学）
平成 7年 4月	北海道大学工学部助教授
平成 9年 4月	北海道大学大学院工学研究科助教授
平成12年 1月	北海道大学大型計算機センター教授
平成15年 4月	北海道大学情報基盤センター教授

北方生物圏フィールド科学センター（植物園）教授

冨士田（ふじた）　裕子（ひろこ）　氏

平成元年10月に着任し、33年半もの長い間、北海道大学にお世話になりました。この間、調査研究を共にした学生や院生の皆様、そして研究仲間の先生方や事務・技術職員の皆様のご支援やご協力に心より感謝申し上げます。植物園という施設を預かる身として、平成16年の台風18号による甚大な被害など、予期せぬ様々な事に見舞われ、安眠できないことも多々ありましたが、入園者、あるいは職員や学生が大きな事故に巻き込まれることなく、無事、定年退職を迎え、植物園長の職をバトンタッチできそうで、心から安堵しております。

北海道という自然に恵まれた地で自由に研究することが許される北大の環境は、私の研究生活にとって、ベストの場所でもありました。調査研究のために北海道のフィールドで過ごした日々は、この上もなく幸せな時間であったことを実感しております。十分な研究成果が出せたのかと自問自答すると、残念ながら自信をもって頷けないのですが、植物園の管理運営という責務があったことを差し引けば、そこそこだったのかなと思います。

在職中、改組や法人化など大学をめぐる変革の波に度々遭遇しましたが、今後はさらなる改革や変化が求められると思われます。北海道大学の自由でおおらかな気風が失われることなく、今後もさらに発展することを、心よりお祈り申し上げます。

略　歴

生　年　月　日	昭和32年4月11日
昭和56年 3月	東北大学農学部卒業
昭和61年 3月	東北大学大学院理学研究科生物学専攻博士課程後期修了
同	理学博士（東北大学）
昭和61年 4月	東北大学大学院理学研究科生物学専攻大学院研究生
昭和63年 4月	新潟大学農学部助手
平成元年10月	北海道大学農学部附属植物園助手
平成12年 1月	北海道大学農学部附属植物園助教授
平成13年 4月	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター助教授
平成19年 4月	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター准教授
平成26年 4月	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター教授
平成26年 4月 令和 5年 3月	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏ステーション植物園長

北方生物圏フィールド科学
センター教授

山羽（やまは）　悦郎（えつろう）　氏

1976年に入学して以来、北海道大学にお世話になりました。子供の頃から手塚治虫の漫画が大好きで、特に火の鳥の「未来編」で猿田博士がガラスの培養器で生物を再生しようとしている場面を見て、こんなことができるようになるのだろうかと考えていました。水産学部の発生学遺伝学講座で研究を進めるうち、両生類の胚の生殖細胞が分布する領域を別の胚へ移植するとドナーに由来する配偶子を形成するという論文を知りました。これを水産での種苗生産に応用できないだろうかと考えて、魚の初期発生と生殖系列キメラの研究を始めました。フナとキンギョから作ったキメラ個体が、両方の卵を産み、両生類の実験が魚でも再現できました。その後、たった一つの、生殖細胞の元となる始原生殖細胞があれば、異種の宿主の中で完全な生殖腺を形成し配偶子へ分化することがわかりました。バラバラの細胞から個体を再生することはできませんでしたが生物の潜在力の凄さに驚きました。

こんなマッドな研究を行うサイエンティストを許容し、研究を続けさせてくださった周囲の先生方、支えてくださった学生・事務の皆様、そして北海道大学の自由な学風に感謝いたしております。

略　歴

生　年　月　日	昭和32年5月10日
昭和55年 3月	北海道大学水産学部卒業
昭和58年 3月	北海道大学大学院水産学研究科水産増殖学専攻修士課程修了
昭和60年12月	北海道大学大学院水産学研究科水産増殖学専攻博士後期課程退学
同	北海道大学水産学部助手
平成 7年 4月	北海道大学水産学部附属七飯養魚実習施設助手
平成 7年12月	博士（水産学）（北海道大学）
平成10年 4月	北海道大学水産学部附属七飯養魚実習施設助教授
平成13年 4月	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター助教授
平成15年 4月	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター教授
平成13年 4月 令和 5年 3月	北方生物圏フィールド科学センター水圏ステーション七飯淡水実験所長

保健センター
センター長、教授

橋野（はしの）　聡（さとし）　氏

2023年3月31日をもって長年にわたりお世話になりました北大を定年退職します。私は1982年に北大医学部を卒業して北大第三内科に入局した北大58期ですが、大学に残った同期生も一人減り二人減りで、定年まで母校に残ったのは、私一人でした。2013年4月より同門の先輩である武藏学教授の後任として保健センター長・教授を拝命しました。業務の内容としては、学生と教職員の面談や診療のほかに、学校医としては種々の健康診断への対応と疾病予防教育の二つがあり、産業医としては、職場巡視と健診の事後措置の二つが大きいものでした。

2019年12月からの3年間は、どこの部署も、新型コロナウイルス感染症対策に明け暮れました。準備と施行に最も苦労したのが保健センター職員も総出で対応したワクチンの職域接種（大学接種）でした。会場の設定・設営から維持・補修・改装など、総長の号令の下、1日最大で2,400人のワクチン接種に対応しました。

定年退職まで長い道のりではありましたが、分岐点で困ったときはいつも誰かに助けて頂き、多くの人の支えがあってゴールまでたどり着いた感を強く持っています。これまでの感謝の念を持って、今後は、外から北大を応援したいと思います。

略　歴

生　年　月　日	昭和32年12月3日
昭和57年 3月	北海道大学医学部卒業
昭和57年 6月	医師免許証取得（第267274号）
昭和57年 6月	北海道大学医学部附属病院　第三内科　医員
昭和57年11月	北海道社会事業協会余市病院　内科　医師
昭和60年 5月	札幌北楡病院　内科　医師
昭和61年11月	北海道大学医学部附属病院　第三内科　医員
平成 4年 9月	札幌簡易保険総合健診センター　内科　医師
平成 6年 3月	博士（医学）（北海道大学）
平成 7年 7月	北海道大学医学部　内科学第三講座　助手
平成 9年 5月 平成11年 4月	米国ミネソタ大学留学
平成12年 5月	北海道大学病院　第三内科　講師昇任
平成19年 9月	北海道大学大学院医学研究科　准教授昇任
平成25年 4月	北海道大学　保健センター　センター長・教授昇任
平成25年 4月	北海道大学大学院医学研究科　教授兼任

水産科学研究院准教授

西村（にしむら）　欣也（きんや）　氏

平成6年に赴任以来およそ30年の長きにわたり、北海道大学にて教育と研究を専門とする職を全うすることができましたことは、多くの皆様のお陰によるところであります。この間、科学の進展は目覚ましく、教育・研究にそれらを反映させるべく努力を払って参りました。微力ではありましたが、北海道大学における教育と研究に寄与できたかもしれないことを誇りといたします。

略　歴

生　年　月　日　昭和34年9月3日
昭和59年 3月　筑波大学第二学群農林学類卒業
平成元年 3月　筑波大学大学院博士課程農学研究科修了
平成元年 3月　農学博士（筑波大学）
平成元年 8月　文部技官行政職（筑波大学研究協力部研究協力課）
平成 4年 7月　筑波大学生物科学系助手
平成 6年 9月　北海道大学水産学部助教授
平成12年 4月　北海道大学大学院水産科学研究科助教授
平成17年 4月　北海道大学大学院水産科学研究院助教授
平成19年 4月　北海道大学大学院水産科学研究院准教授

理学研究院准教授

松本（まつもと）　健司（けんじ）　氏

生物由来の時系列データの解析がしたくて、京都で物理の博士号をとる前に、出身研究室の助手の方が以前在籍していた薬学部の粘菌等を扱っていた研究室にやってきたのが最初でした。来る前には研究のことしか頭になく、周りには北大へ行くと言うと羨しがる方もいましたが、北海道については特に興味がありませんでした。それが数年北大で過ごす内に北海道から出たくないという状態になり、折しも数学科が数理科学を拡充するということで出身研究室の先輩が北大に移ってきて、私も数学科へ移ることが出来ました。多少実験もしますが、理論家というか数値計算屋なので研究場所は比較的自由に選べるのです。最近はだいぶん緩和されてきましたが、北大に居ることの最大のデメリットは旅費の問題です。来た当初は一度本州行くのに10万円とかしてましたので研究会にも呼びにくいと言われたものです。それでも私にとっては環境からのメリットの方がはるかに大きく、結局北大には40年近く教員としてお世話になりました。退職後も住み続けるつもりです。

略　歴

生　年　月　日　昭和32年8月10日
昭和55年 3月　京都大学理学部卒業
昭和60年11月　京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了
昭和60年11月　理学博士（京都大学）
平成 2年 1月　北海道大学薬学部助手
平成 6年 4月　北海道大学理学部助教授
平成 7年 4月　北海道大学大学院理学研究科助教授
平成18年 4月　北海道大学大学院理学研究院助教授
平成19年 4月　北海道大学大学院理学研究院准教授

歯学研究院准教授

吉原（よしはら）　俊博（としひろ）　氏

昭和54年に北海道大学理科II類に入学して以来、令和5年まで、鹿児島大学赴任や留学を除いても、約36年もの間、北海道大学で過ごさせていただきました。街の中心にありながら、広大で美しいキャンパスで、楽しく過ごせたことを幸せに思います。

定年前の3年間はコロナ禍により、学生教育はもとより、研究も活動が制限されたことが残念です。最近はコロナ禍以前の状態に戻りつつありますが、定年となってしまいました。

これまでご指導いただいた諸先生、同僚、事務の皆様に心よりお礼を申し上げるとともに、北海道大学がますます発展していくことをお祈り申し上げます。

令和5年4月からも特任教員としてお世話になりますので、よろしくお願いいたします。

略　歴

生　年　月　日　昭和35年3月23日
昭和58年 3月　北海道大学農学部卒業
平成元年 3月　北海道大学歯学部卒業
平成 5年 3月　北海道大学大学院歯学研究科博士課程修了
平成 5年 3月　博士（歯学）（北海道大学）
平成 6年 7月　北海道大学歯学部附属病院助手
平成 9年11月　北海道大学歯学部助手
平成11年 7月　鹿児島大学歯学部附属病院講師
平成15年10月　鹿児島大学医学部・歯学部附属病院講師
平成19年 5月　北海道大学病院講師
平成24年 4月　北海道大学大学院歯学研究科准教授
平成29年 4月　北海道大学大学院歯学研究院准教授

歯学研究院准教授

兼平（かねひら）　孝（たかし）　氏

私は昭和60年3月に北海道大学歯学部を卒業し、その年の4月から予防歯科学教室の一員として入局させていただきました。予防歯科学教室を選んだのは、歯の治療が“敗戦処理”のように思えて、「齲蝕をはじめとする口腔疾患は予防すべきもの、予防できるもの」という当時の谷　宏教授（故人）の予防の考えに強く惹かれたからです。

昭和62年1月には、当時の歯学部附属病院助手の職を拝命し、令和5年3月までの37年間北海道大学の一教員として、臨床、教育、研究に携わることができたのは大きな歓び以外の何物でもありません。また、道内では数少ない無歯科医地区の天売島で30年以上にわたり、年3回の島民の歯科診療に従事できたことは、大学人、歯科医師としての自分にとって人生の大きな財産となりました。

この度の定年退職を迎え、今まで私を支えてくださった北海道大学とその構成員の皆様のご厚意に深く感謝すると共に、皆様のご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げつつ、大学を去る所存であります。

略　歴

生　年　月　日　昭和32年4月18日
昭和60年 3月　北海道大学歯学部卒業
平成 5年 3月　博士（歯学）（北海道大学）
昭和62年 1月　北海道大学歯学部附属病院助手
平成元年 4月　北海道大学歯学部助手
平成 6年 4月　北海道大学歯学部附属病院講師
平成15年10月　北海道大学医学部・歯学部附属病院講師
平成16年 4月　北海道大学病院講師
平成28年 4月　北海道大学大学院歯学研究科准教授
平成29年 4月　北海道大学大学院歯学研究院准教授

情報科学研究院准教授

有田（ありた）　正志（まさし）　氏

1997年4月に、当時の工学研究科物質情報基礎工学分野に助教授として赴任しました。札幌に到着した3月31日は大雪で、足元もおぼつかないまま当時あったクラーク会館の宿泊施設に入ったのを覚えています。札幌に慣れた今思うと、大した雪ではなかったのだと思います。北大に赴任後は電子顕微鏡を用いたナノ構造の観察・評価、電磁気学的特性との相関についての研究を学生とともに行ってきました。その際私にとって大切だったのは、いかに学生の能力を引き出していくか、という事でした。4年生として研究室配属になったときに「大丈夫かな？」と思っていた学生が、卒業時または大学院修了時に立派な意見を持てるようになったときには、うれしく思ったものです。「さっさと先生を追い越して行け！」、学生にはよく言っておりました。本当にそうなったときには悔しくもありますが、一方では至福の時です。学生諸君には、言われたからやるというのではなく、自分なりに問題を見つけ、それを解決していく努力を続けて頂きたいと思っています。それが未来の北海道大学、ひいては日本・世界の進歩に繋がって行くでしょう。学生・同僚とともに25年以上も楽しい時を過ごすことが出来ました。関係の皆さんに感謝すると共に、北海道大学の今後の発展を祈念しております。有難うございました。

略　歴

生　年　月　日　昭和32年10月9日
昭和55年 3月　広島大学理学部卒業
昭和60年 3月　大阪大学大学院基礎工学研究科博士前期課程退学
昭和62年 9月　理学博士（スイス連邦工科大学チューリッヒ校）
昭和62年 7月　日本チバガイギー株式会社国際科学研究所
平成 2年10月　名古屋大学 教養部、工学部 講師
平成 9年 4月　北海道大学 大学院工学研究科 助教授
平成16年 4月　北海道大学 大学院情報科学研究科（院）助教授、准教授

情報科学研究院准教授

工藤（くどう）　信樹（のぶき）　氏

学生として学部4年間と大学院5年間を、企業での7年間の後今度は教員として28年間を、総計37年間北大にお世話になりました。師に導かれ、学生に講義するようにもなり、多くの気の良い院生達と実験や議論に明け暮れた時間の記憶は、私の人生の宝です。いろいろなことがありましたが、同僚や周囲の方々のご助力で退職を迎えることができました。

工学と医学をつなぐ境界領域に興味を持ち、学部では電子工学科を選択、大学院では当時新設の生体工学専攻に進学、企業では超音波治療装置の開発・設計、大学でも新しい超音波治療の可能性を探りました。北大で沢山の他分野の先生に協力をいただき仕事を進められたことは、望外の喜びでした。

最後の3年はコロナとの共存でした。机の前にじっとしていてもしょうがないので、人の少ないキャンパスを闇雲に歩き回り、思考に浸る沢山の時間を過ごすことができました。学生時代とは道も建物もずいぶん変わっていますが、入学直後に寮歌指導を受けた原っぱも、徹夜で大学祭の準備をした空き地も、研究室の皆とジンパをした場所も、よく見るとちゃんと残っていましたし、新しい発見も沢山ありました。この永い期間にわたり変わらない自然の息吹を感じさせてくれたキャンパスにも感謝したいと思います。ありがとうございました。

略　歴

生　年　月　日　昭和32年12月23日
昭和57年 3月　北海道大学工学部卒業
昭和59年 3月　北海道大学　大学院工学研究科　修士課程修了
昭和62年 3月　北海道大学　大学院工学研究科　博士課程修了
昭和62年 3月　工学博士（北海道大学）
昭和62年 4月 ┐
平成 7年 6月 ┘民間（株式会社東芝）
平成 7年 7月　北海道大学　工学部　助手
平成 9年 4月　北海道大学　大学院工学研究科　助手
平成16年 4月　北海道大学　大学院情報科学研究科　助手
平成19年 4月　北海道大学　大学院情報科学研究科　助教
平成21年 6月　北海道大学　大学院情報科学研究科　准教授
平成31年 4月　北海道大学　大学院情報科学研究院　准教授

北海道大学病院准教授
長（ちょう）　和俊（かずとし）　氏

北海道で生まれ育ち、小児期に病弱であったこともあり、いつの間にか小児科医師を目指していました。本学医学部を卒業して小児科に入局した昭和60年当時、早産児の予後を決定的に左右していた呼吸窮迫症候群の特効薬である人工肺サーファクタントが治験段階にありました。その魔法の様な効果に魅せられて、肺サーファクタント研究の道へ進みました。人工肺サーファクタントの開発者である藤原哲郎先生に師事するため、3年間岩手医科大学に国内留学し、北海道に戻ってからも、基礎と臨床の両面で肺サーファクタントに関連したテーマを追って参りました。非常に稀な疾患である、先天性肺胞蛋白症の家族例に巡り合い、20年かけてその原因がOAS1異常であることを解明することが出来ました。また、遺伝性間質性肺疾患の遺伝子パネルが保険収載されることで社会実装されました。

これまで楽しく小児・新生児医療を継続することができたことを先輩・同僚・後輩たちに感謝すると共に、2人の娘を健康に育ててくれた北大キャンパスの自然にも感謝をさせていただきます。

略　歴

生　年　月　日	昭和35年2月10日
昭和60年　3月	北海道大学医学部卒業
平成　2年10月	岩手医科大学副手
平成10年　3月	博士（医学）（北海道大学）
平成11年　4月	北海道大学医学部附属病院助手
平成12年　4月	北海道大学医学部附属病院講師
平成15年10月	北海道大学医学部･歯学部附属病院講師
平成16年10月	北海道大学病院講師
平成18年　4月	北海道大学病院助教授
平成19年　4月	北海道大学病院准教授
平成22年　4月 令和　5年　3月	環境健康科学研究教育センター兼務
平成30年　4月 令和　5年　3月	北海道大学病院周産母子センター部長

理学・生命科学事務部長

金川（かながわ）　眞行（まさゆき）　氏

昭和56年4月、市内の歩道にまだ雪が山と残る春、事務局で辞令を受け取り、迎えに来てくれた職員の方（直属掛長）と泥道に板を渡してあるような裏道を歩き、配属された歯学部附属病院に到着しました。辞令交付前、周りから「病院は忙しいらしい」と聞こえていたので、どんな所か不安で一杯でした。久しぶりの18歳新人の配属らしく、看護婦（当時）さん、薬剤師さん、診療放射線技師さん、事務室の方々、さらに病院長も皆優しく迎えてくれ、不安なく仕事が始められました。

それから42年、明るく元気で運動だけが取り柄の職員が、関係各位の指導のお陰で何とか人並みに仕事をこなせるようになり、係長になり、最後は管理職まで務めさせていただき、無事定年を迎えることができました。

これまで、たくさんの方にお世話になりました。職場の同僚、バレー部の先輩、野球部、バドミントン部、テニス同好会の仲間・・・。そんな中でも、採用になり入寮した第三職員寮（独身寮）の諸先輩には公私共にお世話になり、感謝の念に耐えません。

色々な方々から受けた恩は下に返していくものだと思っています。4月から再雇用されますので、どこまで返せるか、頑張りたいと思っています。

連休明けにはコロナ2019と呼称が変わり感染症法上の扱いも5類に変わります。

北大が再び活気あふれるキャンパスとなり、教職員、学生、市民が笑顔でキャンパスを闊歩し、充実した人材育成、先端研究、社会貢献が行えるようになることを祈念いたします。

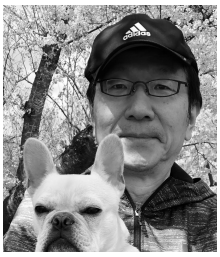
長い間お世話になりました。

略　歴

生　年　月　日	昭和38年1月9日
昭和61年 3月	北海学園大学法学部卒業
昭和56年 4月	北海道大学
平成 8年 4月	北海道大学経理部主計課総務掛主任
平成13年 4月	国立大雪青年の家庶務課庶務係長
平成16年 4月	北海道大学薬学研究科・薬学部庶務掛長
平成19年 4月	北海道大学北キャンパス合同事務部係長
平成22年 4月	北海道大学北キャンパス合同事務部事務長補佐
平成24年 4月	北海道大学総務企画部広報課課長補佐
平成26年 4月	北海道大学総務企画部総務課課長補佐
平成29年 4月	北海道大学総務企画部広報課長
平成30年 4月	北海道大学総務企画部情報企画課長
令和 2年 4月	北海道大学理学・生命科学事務部長

工学系事務部長

佐々木（ささき）　博之（ひろゆき）　氏



私は、昭和63年に本学に奉職し、現在に至るまでの30数年間、その大半を会計系・財務系の業務に従事してきました。私の職業人としてのターニングポイントは、平成16年4月の国立大学の法人化にありました。それまでは、国家公務員の身分であり、法令等に基づき、前例を踏襲しつつ、膨大かつ非合理的な事務処理を熟すというのが日課でありましたが、法人化以降は自らがルールを作り、それに則って仕事を進めることができるようになったのは非常に歓迎されることでした。法人化後は、前例踏襲打破をポリシーに、財務会計業務の合理化推進、増収・経費削減策の実施等々、幾多の困難はありましたが、良き仲間の協力を得て、やりがいある仕事を沢山させていただきました。中でも、嬉しかったのは、大学構内にコンビニを設置できたこと、また、残念だったことは、日本ハムファイターズの誘致を実現できなかったことが思い出されます。賛否両論があるとは思いますが、うまく事が運んでいれば、この3月には北大構内で日ハムの開幕戦が行われていたかもしれません。

本学を取り巻く財政状況は依然として厳しいものがあり、法人化以前とは隔世の感があります。事務改革の推進など、志半ばではありますが、後進に後を託して第一線から退きます。ここに至るには、上司、先輩、同僚、後輩の皆様、そして、交流のありました先生方によるご指導、ご支援の賜物であることを改めて実感する次第です。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

そして最後に一言。後輩達よ、北大の将来を頼んだぞ！

略　歴

生　年　月　日	昭和37年11月30日
昭和63年10月	北海道大学
平成13年 4月	室蘭工業大学会計課専門職員
平成14年 4月	室蘭工業大学会計課用度係長
平成15年 4月	北海道大学経理部第一契約課政府調達掛長
平成16年 4月	北海道大学監査室監査掛長
平成17年 4月	北海道大学財務部主計課財務法規係長
平成19年 4月	北海道大学財務部主計課係長
平成20年 4月	北海道大学学術国際部研究協力課課長補佐
平成22年 4月	北海道大学財務部主計課課長補佐
平成24年 4月	北海道大学財務部資産運用管理課長
平成28年 4月	北海道大学財務部調達課長
平成29年 4月	北海道大学財務部次長
平成29年10月	北海道大学政策調整室長
令和 2年10月	北海道大学財務部次長
令和 3年 4月	北海道大学工学系事務部長

学務部学務企画課長

西田（にしだ）　政利（まさとし）　氏

昭和56年に採用され、途中、北見工大、旭川医大、小樽商大での勤務も経て、主に学務系事務に携わらせていただきました。この度定年を迎え、本学を去ることとなりましたが、これまでの仕事で繋がりのあった多くの方々のお顔や、失敗談も含め様々な経験が思い起こされます。事務関係者のみならず多くの先生方にも助けられ支えられながら、曲がりなりにも過ごすことができたことを感謝申し上げます。

学務系事務は教育現場に密接した仕事ですが、本学の教育を取り巻く環境はめまぐるしく変化しています。学務部における仕事も試行錯誤の繰り返しでしたが、私にとって糧となる多くの貴重な経験をさせていただきました。また、採用前の子供時代から慣れ親しんできた札幌キャンパスの様々な風景や、職場として過ごした建物、特に旧理学部（総合博物館）や、教養部事務部時代を含めて通算で15年近くを過ごした高等教育推進機構には愛着を感じており、感慨深いところです。

この3年間は新型コロナウイルス感染症への対応に振り回された感がありますが、ようやく非日常的世界の収束に向け明るい見通しとなりつつあります。マスクを気にすること無く、互いの表情が見え賑やかに交流する学生達で溢れる、本来のキャンパス風景に早く戻ることを願っております。

北海道大学の益々の発展と皆様のご健勝とご活躍をお祈りいたします。長い間、ありがとうございました。

略　歴

生　年　月　日　昭和37年6月4日
昭和56年 4月　北海道大学
平成13年 4月　北見工業大学総務課学事法規係長
平成16年 4月　北見工業大学総務企画課広報・法規係長
平成17年 4月　北海道大学学務部入試課入試第三係長
平成19年 4月　北海道大学学務部入試課係長
平成21年 4月　旭川医科大学教務部入試課長
平成24年 4月　旭川医科大学教務部学生支援課長
平成28年 4月　小樽商科大学学生支援課長（兼）学生支援課キャリア支援室長
平成30年 4月　北海道大学学務部教育推進課長
令和 2年 4月　北海道大学学務部学務企画課長

工学系事務部情報科学研究院
事務課長

紙丸（かみまる）　雅実（まさみ）　氏

木鶏たりえず。

まだ寒さの残る道北の小さな港町から大都会札幌へやってきた人見知りな少年は、昭和56年4月北海道大学工学部経理課で公務員生活（当時）をスタートさせました。

経理掛（係）現金収納窓口で大勢の学生の入学料や授業料などの現金徴収、目もくらむほど大金の給与やボーナスの現金袋詰め、時刻表とにらめっこしながらの旅費計算等々、日々覚える仕事に新鮮さと喜びを感じていたあの頃。

時は流れそれからン十年。近年は荒波に飲み込まれ、息を吸うことさえ難しく、当時のような充実感はいずこへ・・・。

桜は八分咲きを満開と言うのだとか。田舎から出てきた少年に仕事人としての八分咲き、とは言えないまでも八分程度の貢献はあったか、五分咲きほどには存在を示せたか。それとも惑わされ続け、花開くことを忘れてしまったか。自問自答が続きます。
いまだ木鶏（もっけい）たりえず。

ともあれ、先輩方や同僚に支えられ無事定年を迎えられたことに感謝申し上げます。

立場は変わりますがいましばらくお世話になります。微力ながら北海道大学のお手伝いをさせていただければと思います。

略　歴

生　年　月　日　昭和37年7月7日
昭和56年 3月　北海道羽幌高等学校卒業
昭和56年 4月　北海道大学
平成14年 4月　旭川工業高等専門学校会計課出納係長
平成17年 4月　北海道大学病院医療支援課専門職員
平成17年10月　北海道大学病院経営企画課経営情報係長
平成19年 4月　北海道大学企画部情報企画課係長
平成20年 4月　北海道大学経済学研究科・経済学部係長
平成22年 4月　北海道大学法学研究科・法学部係長
平成24年 4月　北海道大学病院医事課医療支援室室長補佐
平成26年 4月　北海道大学病院医療支援課課長補佐
平成27年 4月　北海道大学総務企画部人事課課長補佐
平成29年10月　北海道大学メディア・観光学事務部事務長
令和 2年10月　北海道大学工学系事務部情報科学研究院事務課長

北海道大学病院医療支援課長

井上（いのうえ）　義彦（よしひこ）　氏

昭和56年北海道大学に採用され、公務員生活がスタートしました。本学で27年、道内他機関15年、合計42年間の公務員･国立大学法人等職員生活も、無事この3月で定年を迎えることとなりました。

思い起こせば、入職当時は今とは異なり、土曜日の半日勤務、事務宿日直がありました。日常では、業務中はもとより、諸先輩や同僚との呑み会、1泊2日の観楓会、忘年会や仕事納め会、新年交礼会でいろいろご指導いただいたことが蘇ります。

本学以外では、平成7年4月から勤務した国立大雪青年の家で、青年の家のPRと地域貢献を兼ねて美瑛町の仮装盆踊りへ参加するための大型あんどん造りのお手伝いも懐かしい思い出です。

その後、平成13年4月には国立青少年教育施設の独立行政法人化、平成16年4月からの国立大学の国立大学法人化（高専の独立行政法人化）もありました。

また、課長職としては、平成21年の豚由来の新型インフルエンザ予防対策、平成23年3月の東日本大震災、平成27年の釧路高専創立50周年記念事業、平成30年9月の北海道胆振東部地震、令和2年2月から続いている新型コロナウイルス感染症への予防対策、令和2年の北見工大創立60周年記念事業（コロナ禍で記念式典・祝賀会を中止）等に携わらせていただきました。いろいろなことがあった42年間でした。

定年を無事に迎えられましたのは、上司の適切なアドバイスと部下の協力の賜です。心より感謝申し上げますとともに、北海道大学の益々の発展を祈念しまして定年退職のご挨拶とさせていただきます。長い間、お世話いただき誠にありがとうございました。

略　歴

生　年　月　日　昭和37年10月9日
昭和56年 4月　北海道大学
平成13年 4月　北海道大学北方生物圏フィールド科学センター専門職員
平成16年 4月　北海道大学病院医療企画課専門職員
平成17年10月　北海道大学病院医事課外来係長
平成18年 4月　北海道大学北方生物圏フィールド科学センター会計係長
平成19年 4月　北海道大学北方生物圏フィールド科学センター係長
平成21年 4月　旭川医科大学病院事務部医療支援課長
平成23年 4月　釧路工業高等専門学校学生課長
平成26年 4月　釧路工業高等専門学校総務課長
平成27年 4月　釧路工業高等専門学校研究協力室長に併任
平成28年 4月　苫小牧工業高等専門学校総務課長
平成31年 4月　北見工業大学総務課長
令和 3年 4月　北海道大学病院医療支援課長

低温科学研究所事務長

伊藤（いとう）　美香（みか）　氏

大雪の冬を越えた昭和56年4月、当時北端に位置していた低温科学研究所の会計掛から北大職員としての毎日が始まりました。

異動のたび、それまでの部局との文化の違いに戸惑うものの、次の異動が決まる頃にはすっかりその部局に馴染み、いつも離れがたく淋しい気持ちになるのが常でした。そのような私に何度も新しい景色を見る機会を与えていただいた北大に心から感謝しております。

最後の数年で、医学部創立100周年、低温科学研究所創立80周年の節目に携わることが出来たのは貴重な経験となりました。この一大事業を滞りなく進めるために、毎晩遅くまで作業してくれた同僚に改めて感謝申しあげます。

今となっては、元気！健康！体力！だけで駆け抜けてきた42年間が大過なく無事に終えられることに心からほっとしているところです。これもひとえに、頼りがいのある上司や同僚、後輩、各部局の先生、学生、そして、同期、バドミントン部の仲間など、縁あって巡り会えたすべてのみなさまのおかげです。

4月からは大好きなこのキャンパスを離れますが、3年後に創基150周年を迎える北海道大学が更に発展し続けていくことを祈念いたしますとともに、みなさまのご健勝とご活躍をお祈り申しあげます。

長い間お世話になり本当にありがとうございました。

略　歴

生　年　月　日　昭和38年3月6日
昭和56年 4月　北海道大学
平成21年 7月　北海道大学北キャンパス合同事務部係長
平成24年 4月　北海道大学医学系事務部総務課係長
平成27年 4月　放送大学学園北海道学習センター事務長
平成30年 4月　北海道大学医学系事務部総務課長
令和 3年 4月　北海道大学低温科学研究所事務長

北キャンパス合同事務部事務長

中田（なかた）　雄二（ゆうじ）　氏

3月末で定年退職を迎えることになり、時が経つのは早いものだなと感じております。

昭和56年4月に釧路高専に採用され、平成15年に北海道大学に異動となり、その後の釧路高専での2年間を含め通算42年間勤めさせていただきました。

これもひとえに、その時々にご指導いただいた上司、先輩、同僚、お酒を飲みに誘ってくれた良き部下、後輩、ご支援下さった先生方のお陰と心から感謝を申し上げる次第です。

最後に、大学を取りまく環境は、今後も厳しい状況が続くと思われますが、北海道大学の益々のご発展と、皆様方のご健勝とご活躍をお祈り申し上げ、挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

略　歴

生　年　月　日	昭和37年6月16日
昭和56年 4月	釧路工業高等専門学校
平成15年 4月	北海道大学
平成18年 4月	北海道大学薬学事務部会計係長
平成19年 4月	北海道大学薬学事務部係長（会計担当）
平成21年 4月	釧路工業高等専門学校総務課課長補佐（財務担当）
平成23年 4月	北海道大学理学・生命科学事務部事務課課長補佐
平成26年 7月	北海道大学財務部経理課課長補佐
平成27年 4月	北海道大学薬学事務部事務長
平成30年 4月	北海道大学低温科学研究所事務長
令和 3年 4月	北海道大学北キャンパス合同事務部事務長

北海道大学病院医療技術部長

藤田（ふじた）　勝久（かつひさ）　氏

現在の医学部保健学科が設立される前の診療放射線技師学校に入学以来現在まで42年間この北海道大学に通ってきました。最近は大学構内に足を踏み入れる事は殆どなかったですが銀杏並木の四季折々の変化を横目で楽しんでいました。旭川出身で冬の寒さは耐えられますが雪の多さ（自宅はあいの里）は何年たっても慣れませんでした。定年後もこの環境で生きていくので冬の楽しみを作りたいところです。

北海道大学病院では診療放射線技師として医療の現場で30年間勤務し、その後放射線技師長として6年間そして医療技術部長として1年間就任させていただきました。医療技術部は診療放射線技師、臨床検査技師をはじめ今年度より社会福祉士も加わり6部門13職種の集合体です。まとまることで組織力が大きくなるメリットは多大ですが、職種間の処遇の差が問題となっています。この是正には大学の就業規則の改訂が必要であり皆様のお力添えをお願いしたいところです。

長年に渡ってお世話になった北海道大学並びに北海道大学病院の皆様に感謝するとともに大学として病院として益々の発展を遂げられますよう祈念し最後の挨拶とさせていただきます。

略　歴

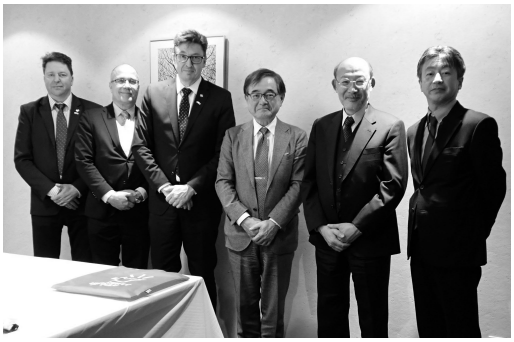
生　年　月　日	昭和37年12月2日
昭和59年 3月	北海道大学医学部附属放射線技師学校卒業
昭和59年 4月	北海道大学医学部附属病院放射線部
平成12年 4月	北海道大学医学部附属病院放射線部主任診療放射線技師
平成15年10月	北海道大学医学部・歯学部附属病院診療支援部主任診療放射線技師
平成16年 4月	北海道大学病院診療支援部主任診療放射線技師
平成24年 4月	北海道大学病院診療支援部副診療放射線技師長
平成28年 4月	北海道大学病院医療技術部診療放射線技師長
令和 4年 4月	北海道大学病院医療技術部長

▌表敬訪問

海外

年月日	来　訪　者	来 訪 目 的
5.2.3	駐日英国大使館　Helen Smith 首席公使	今後の交流に関する懇談
5.2.6	オウル大学（フィンランド共和国）　Jouko Niinimäki 学長	今後の交流に関する懇談
5.2.14	ラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校（タイ王国）　Sommai Pivsa-Art 学長	今後の交流に関する懇談
5.2.24	駐日デンマーク王国大使館　Peter Taksøe-Jensen 特命全権大使	今後の交流に関する懇談

Helen Smith 駐日英国大使館首席公使（中央左）



Jouko Niinimäki オウル大学学長（中央左）

Sommai Pivsa-Art ラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校学長（中央）

Peter Taksøe-Jensen 駐日デンマーク王国特命全権大使（左から4人目）

（国際部国際連携課）

▌人事

令和5年2月28日付発令

新　職　名（発令事項）	氏　　名	旧　職　名（現職名）
【教授】		
（辞職）	境　　信　哉	大学院保健科学研究院教授

令和5年3月1日付発令

新　職　名（発令事項）	氏　　名	旧　職　名（現職名）
【教授】		
大学院医学研究院教授	的　場　光太郎	大学院医学研究院講師
低温科学研究所教授	木　村　勇　気	低温科学研究所准教授

新任教授紹介

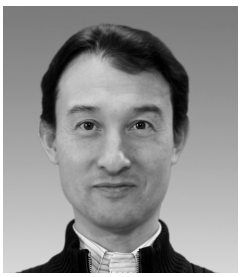
令和5年3月1日付

医学研究院教授に

的場（まとば）　光太郎（こうたろう）　氏

社会医学分野　法医学教室

生年月日
昭和55年12月28日
最終学歴
北海道大学医学科（平成17年3月）
博士（医学）（北海道大学）
専門分野
法医学



低温科学研究所教授に

木村（きむら）　勇気（ゆうき）　氏

雪氷新領域部門
宇宙雪氷学分野

生年月日
昭和51年6月
最終学歴
立命館大学大学院理工学研究科総合理工学専攻博士後期課程修了（平成14年3月）
博士（理学）（立命館大学）
専門分野
ナノ物質科学

▌訃報

理事・副学長　吉見（よしみ）　宏（ひろし）　氏
（61歳）

理事・副学長の　吉見　宏　先生が、病気療養中のところ、1月2日にご逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

吉見先生は、会計・監査を中心に研究を進め、『企業不正と監査』（税務経理協会、1999年）及び『監査期待ギャップ論』（森山書店、2005年）など、企業不正あるいは期待ギャップに関する研究は、監査研究奨励賞（日本監査研究学会）を受賞するなど学界で高く評価されました。会計・監査の研究に注力する一方、「人間の営みのあるところには必ず会計の要素がある」との考えの下で「人があまりやっていない分野を開拓すること」を意識し、内部統制、内部評価、非営利会計、地方自治体などの公会計・公監査論の開拓、簿記をはじめ、国際会計、管理会計、さらには社会地域や交通経済に至るまで広範な研究活動を精力的に続けられました。

これらの研究成果は、当該の学界に対する貢献にとどまらず、内閣府、金融庁、経済産業省、会計検査院、札幌国税局、北海道、札幌市など多数の公官庁、大学基準協会、小樽商科大学、名古屋大学の評価委員を通じた他大学、日本公認会計士協会における活動を通じた会計実務界、大学生協北海道事業連合理事長などを通じた学生生活への支援活動、北海道旅客鉄道株式会社（JR北海道）の社外監査役を通じた北海道就中地方交通網の維持・発展活動、テレビ・ラジオを通じたメディア発信など、社会に対しても多大な貢献として結実しました。

吉見先生は、学部・修士・博士の29期延べ500名を超えるゼミ生の指導など、教育にも熱心にあたっていました。特に、専門に凝り固まらずに広い視野でさまざまなことに関心を持つよう「総合大学」である北海道大学で学ぶ意義を説かれていました。「大学での1番の思い出は吉見ゼミ」という卒業生もたくさんおり、吉見先生の「想い」は、これらの卒業生に受け継がれ、社会に拡がっていくでしょう。

2020年10月から本学の理事・副学長、最高財務責任者として、財務、経理の適正管理を担当すると共に、広報・社会連携統括、ブランディング、コンプライアンス、ハラスメント対応等の多岐にわたる重要な業務を適正に執行することで、大学の発展に尽力されました。

特に、広報・社会連携室長として、北海道大学の特色ある教育研究活動を、広く社会に向けて発信する取組や、本学が有する成果や資源を活用することにより、社会の発展に貢献するため、北海道や札幌市等の自治体との包括連携協定締結を推進されました。

さらに、喫緊の課題を検討するため設置された未来戦略本部において、大学憲章策定検討部会、社会連携事業検討部会の部会長を務め、また経営的収入検討部会、大学債検討部会でも中心的な役割を果たすなど、本学が直面する様々な課題に取り組み、大学運営の推進に多大な貢献をされました。

こうした永年にわたる教育・研究等へのご功績に対し、1月31日（火）に「正四位瑞宝中綬章」受章が決定しました。

また、3月3日（金）に学術交流会館において、本学と大学院経済学研究院の主催で、しめやかに「吉見宏理事・副学長を偲ぶ会」が執り行われました。吉見先生のご貢献に感謝し、謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

（総務企画部秘書室・経済学院・
経済学研究院・経済学部）

名誉教授　土屋（つちや）　博（ひろし）　氏

（享年84歳）

名誉教授　土屋　博　先生が、2月14日（火）にご逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

土屋先生は1938年9月29日東京に生まれ、1962年3月に北海道大学文学部哲学科を卒業、1964年3月に同大学院文学研究科修士課程を修了、1967年3月に同博士課程を単位取得退学されました。同年4月に北海道大学文学部宗教学講座助手に採用され、1970年4月に同講座講師、1973年1月に同講座助教授、1986年10月には教授に昇任され、2002年3月31日の定年退官まで本学に奉職されました。さらに、平成14年4月から平成21年3月まで、北海学園大学人文学部教授を務められました。北大在職中は大学評議員を始めとする多くの全学関係の学務、また学部・研究科内では施設計画委員長など多数の委員を、さらに学外文部行政においても学術審議会専門委員、大学設置・学校法人審議会専門委員など数多くの委員を歴任されました。

土屋先生の研究業績は多岐に及びます。まず、歴史的批判的方法に依拠した聖書学の業績を多く発表され、昭和51年には日本宗教学会賞を受賞されました。また、当時注目され始めていた現象学的社会学、構造主義、受容理論など新しい理論をいち早く取り入れた研究成果として『牧会書簡』（1990）、『聖書の中のマリア』（1992）をまとめられました。さらに、現代の宗教学における教典論の意義を明らかにし、特にキリスト教に即してその議論を展開した『教典になった宗教』（2002）や宗教概念批判の成果を踏まえ、「宗教」研究を「宗教文化」研究の地平に開くことを提唱した『宗教文化論の地平　日本社会におけるキリスト教の可能性』（2013）など多くの重要な研究成果を公刊されました。多大なご貢献にあらためて深く感謝申し上げますとともに、ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（文学院・文学研究院・文学部）

名誉教授　引地（ひきち）　邦男（くにお）　氏

（享年87歳）

名誉教授　引地邦男　先生は、2月5日にご逝去されました。

引地先生は、昭和11年1月2日に北海道で生まれ、昭和34年に北海道大学理学部物理学科を卒業、昭和39年3月北海道大学理学研究科物理学専攻博士課程を修了理学博士の学位を取得されました。昭和39年4月、前年新設の北海道大学理学部高分子学科の助手に任用され、昭和42年に同学科の講師に昇任されました。昭和42年7月から昭和44年9月まで、アメリカ原子力委員会の招きで米国イリノイ州アルゴンヌ国立原子力研究所生物医学部門に留学されました。帰国後の昭和44年には北海道大学理学部高分子学科助教授に、昭和52年には同学科教授に昇任され、高分子固体物理学講座を担当されました。平成11年3月定年退官され、同年4月北海道大学名誉教授の称号を授与されました。この間、先生は多くの学部学生・大学院生・留学生の教育と研究指導に尽力されました。

研究面では、固体物理学分野で活用されていた核磁気共鳴(NMR)法をいち早く高分子固体の分子運動解析に適用し、ポリアミノ酸固体やポリエーテル系高分子固体の分子運動の研究など先駆的研究を展開されました。さらに、結晶化が難しいタンパク質の高分解能NMRを利用した構造解析、NMRによるタンパク質構造解析のための新規測定方法の開発、固体NMRによる無定形高分子の物性の構造的基盤構築、高分子ブレンドの相溶性の研究などに取り組み、国際的にも高く評価される数々の業績を残されました。これらの研究成果に対し、平成9年高分子学会より高分子科学功績賞を授与されました。

学内では、理学部長、理学研究院長を務められ大学院重点化など大学の管理・運営に尽力されました。学外では、文科省学術審議会専門委員、日本学術振興会特別研究員審査会専門委員、北海道科学技術審議会委員など、数々の要職を歴任されました。

平成26年には瑞宝中綬賞を受与されました。

引地先生の長年に亘るご功績に敬意を表し、多大なるご貢献に感謝申し上げ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（生命科学院・先端生命科学研究院）

名誉教授　東（あずま）　市郎（いちろう）　氏
（享年87歳）

名誉教授　東　市郎　先生が1月27日（金）にご逝去されました。

東先生は、昭和10年12月1日石川県輪島市に生まれ、昭和33年3月富山大学薬学部を卒業後、昭和35年3月九州大学大学院薬学研究科修士課程を修了し、昭和40年11月九州大学大学院医学研究科にて薬学博士を取得されました。その間、昭和37年11月に大阪大学助手医学部内科学第三講座研究員となられ大阪に移動し、昭和43年9月～44年9月世界保健機構（WHO）よりSenior Research Training Grantを得てパリ大学理学部生化学研究所に出張、さらに、昭和47年4月～48年3月と昭和52年7月～52年9月にアメリカ合衆国国立衛生研究所（NIH）のVisiting Scientistとして国立アレルギー感染症研究所（NIAID）に出張され、昭和53年7月に帰国して、大阪大学医学部内科学第三講座講師となられました。その後、昭和54年1月に北海道大学免疫科学研究所化学部門の教授に赴任されました。

東先生は、長年にわたり細菌菌体成分を初めとする種々の免疫増強剤（免疫アジュバント）の開発に関する研究を実施されると共に、生体防御機構増強のための基礎的な研究に取り組まれました。特に結核菌菌体成分のうち、細胞壁骨格が主たる免疫強化活性因子であることを明らかにし、その化学構造と免疫増強活性の詳細を解明するなど、その研究成果は500報程の英文学術論文、100報程の著書に発表されました。東先生は、これらの研究を通じて免疫アジュバントを用いる疾患の予防と治療を追求し、現在における自然免疫学に通じる学問領域である「免疫薬理学」のパイオニアとして関係学会の発展に寄与されました。

教育面でも、本学理学研究科化学専攻の協力講座として20年間にわたり大学院生を含め100人以上の若手研究者の教育と研究指導を実施されました。昭和63年4月から2期6年にわたり、免疫科学研究所長として、さらに、平成6年4月から2期3年にわたり触媒化学研究センター長をお務めになり、同センターの時限到来に向けての発展的な改組計画の策定を実施し触媒科学研究所の礎を作られました。その後、平成9年4月より本学副学長として、企画、研究、点検評価、施設、国際交流、留学生分野を担当し本学の改革と充実に努められました。このように東先生は、11年間の長きにわたり、本学の部局長、評議員として全学の管理運営に尽力なさいました。

また、免疫科学研究所が改組した遺伝子病制御研究所には、自身の私財から「東市郎基金」を設立し、当該研究所の若手研究者が海外学会参加する際の旅費、宿泊費の補助事業を平成28年度より、行って来られ、現在も続いています。

東先生の長年にわたる膨大な研究成果と教育への貢献に敬意を表し、ここに謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

（遺伝子病制御研究所・
触媒科学研究所・総合化学院）

名誉教授　梶原（かじわら）　昌弘（まさひろ）　氏
（享年90歳）

名誉教授　梶原昌弘　先生が、12月25日にご逝去されました。

梶原先生は北海道根室郡根室町にお生まれになり、昭和32年3月北海道大学理学部地球物理学科を卒業後、理化学研究所研究員を経て、昭和38年4月に北海道大学水産学部助手に採用されました。その後、昭和42年4月助教授、昭和61年4月教授に昇任され、北洋研究施設海洋環境部門を担当され、平成9年4月に北海道大学名誉教授になられました。

梶原先生は、長年にわたり海洋学、漁場環境学の教育・研究に務められ、理化学研究所時代には当時全く未知の世界であった深海の底層流を測定し、また深海の耐圧容器についての先駆的な研究を行っておられます。

北海道大学では、水産学部が所有していた潜水艇“くろしお号”の運行や改造に深く関わるとともに、物体の水中視程、光束消散係数、海中輝度の海洋光学の基本ともなる物理量を測定し、かつその測定法を確立されました。

これらの基礎的な研究は、現在でも漁網の設計・デザインや、衛星によるリモートセンシングの技術など幅広く生かされております。先生は、くろしお号から観察された海中の大型懸濁粒子（マリンスノー）に興味を持ち、その沈降速度の現場実測に世界で初めて成功されました。また、海洋における物質循環、物質除去に大きな役割を果たすこの大型懸濁粒子の凝集機構についても研究し、人工生成に成功しておられます。

くろしお号での潜行調査は、北海道内にとどまらず、東北・東海地方に至る広範囲まで、実際にそのほとんどの潜行をパイロット兼任の研究者として参加されました。とりわけ北海道周辺及び陸奥湾では、ホタテガイの地撒き漁業の最適漁場選定の基礎となる海底調査資料を提供し、現在のホタテガイ漁業の隆盛をもたらす多大な貢献をされました。

このように、梶原先生は長年にわたって海洋学の教育・研究を通して、特に栽培漁業環境や生物生息環境の分野の進展、大学及び学部の管理運営に多大な貢献をなされ、そのご功績は誠に大きなものです。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（水産科学院・水産科学研究院・水産学部）

名誉教授　箕田（みのだ）　嵩（たかし）　氏

（享年92歳）

名誉教授　箕田　嵩　先生が、1月26日にご逝去されました。

箕田先生は北海道小樽市にお生まれになり、昭和31年3月北海道大学水産学部水産増殖学科を卒業後、昭和33年3月同大学院水産学研究科水産学修士課程を修了、昭和35年5月に同大学大学院博士課程を退学と同時に北海道大学水産学部助手に採用されました。その後、昭和46年6月助教授、昭和52年4月教授に昇任され、水産増殖学科浮遊生物学講座、平成7年4月からは水産海洋学科生物海洋学講座を担当され、平成8年4月に北海道大学名誉教授になられました。

箕田先生は、一貫して北部北太平洋及びベーリング海における動・植物プランクトン、特に動物プランクトン群集の構造と機能の解明に専心し、幾多の分類学的及び生態学的知見の蓄積に貢献されました。練習船を有する水産学部ならではの外洋域のフィールドサイエンスを目指し、学部学生及び大学院生と乗船され多数の有為な人材を育成されました。特にベーリング海において長年にわたって採集したプランクトン試料を解析し、その一翼を担われた「ベーリング海の海洋学」は国内外で高く評価され、当該海域のプランクトン研究の教科書的存在で現在でも広く引用されています。現在、地球規模の海洋変動と生態系のモニタリングが国内外で計画、実施されていますが、温暖化の影響を受けやすい亜寒帯域、極域のプランクトン群集の長期変動に関する日本における先駆的な研究基盤を築いた功績は極めて大きいものです。

学会活動においては、昭和46年3月から平成5年3月まで日本プランクトン学会評議員を務め、特に草創期の同学会の強化、発展のために尽力されました。

学内においては、水産学部附属洞爺湖臨湖実験所長、水産学部水産資料館運営委員会委員長、本学忍路臨海実験所運営委員会委員などを歴任されました。

このように、箕田先生は長年にわたって学術の進展、教育の推進、人材の養成、学部の管理運営に多大な貢献をなされ、そのご功績は誠に大きなものです。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（水産科学院・水産科学研究院・水産学部）

編集メモ

●2月25日（土）、一般選抜（前期日程）個別学力検査等を実施しました。雪が降りしきるなか、道外からもたくさんの受験生が集まりました。試験本番を向かえた受験生たちにエールを贈るかのように、正門前には雪だるまが作られていました。

当日の様子

正門前に並ぶ雪だるま

●3月1日（水）から、本学公式クラウドファンディング第2弾がはじまりました。
2022年11月に本学・READYFOR社共同でクラウドファンディング活用セミナーを開催したところ、約150名が参加し、その中から今回10件のクラウドファンディングプロジェクトが立ち上がりました。
詳細はQRコードよりご覧下さい。

北海道大学クラウドファンディング
https://readyfor.jp/pp/hokudai

裏表紙メモ

今月のキャンパス風景は第一体育館です。第一体育館は、本学の創基80周年を記念した施設整備の一環として昭和38年に完成しました。以来、授業や部活動、式典に利用され大勢の北大生たちを見守ってきた第一体育館。今年度も学位記授与式に参加する卒業生・修了生の姿を見守っていることでしょう。

キャンパス風景 36　第一体育館（北17条西7丁目）

北大時報 ③　No.828　　令和5年3月発行

北海道大学社会共創部広報課　〒060－0808 札幌市北区北8条西5丁目
TEL：（011）706－2610 ／ FAX：（011）706－2092 ／ E-mail：kouhou@jimu.hokudai.ac.jp
https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html